

日本におけるロッシーニ受容の歴史

—— 明治元年から昭和 43 年まで(1868～1968 年) ——

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』(日本ロッシーニ協会紀要)第 34 号(2014 年 2 月発行)の拙稿「日本におけるロッシーニ受容の歴史——明治元年から昭和 43 年まで(1868～1968 年)」¹⁾。書式を変更し、一部表記を改めて日本ロッシーニ協会ホームページに掲載します。(2014 年 8 月)

新たな資料を加え、追加変更の要点を脚注に明記しました。(2015 年 5 月及び 10 月増補改訂)

はじめに

日本で初めてロッシーニの aria が歌われたのは、明治維新から 8 年後の明治 8 年(1875 年)9 月だった。オペラの上演は大正 6 年(1917 年)11 月に始まるが、後述するように最初の 49 年間は《セビーリャの理髪師》だけが演目とされた。

大正末期までの日本のオペラ史に関する最も重要な文献となる増井敬二『日本のオペラ 明治から大正へ』(民音音楽資料館、1984 年)と、同氏による『日本オペラ史 ～1952』(昭和音楽大学オペラ研究所編。水曜社、2003 年)は、日本初のオペラ上演や明治に始まるさまざまな歌劇団の来日に関する情報を網羅しているが、明治期のロッシーニ作品演奏の記述はきわめて乏しく、明治 8 年、14 年、32 年の合計 3 例が挙げられているにすぎない。これは対象をオペラに限定したためであるが、本稿で明らかにするように器楽を含めた演奏はかなりの数にのぼり、そこからさまざまな問題が浮上する。それゆえ前史に当たる諸問題から説き起こし、筆者が諸文献から拾い上げた明治期のロッシーニ作品演奏の事例を I と II に示し、続いて III に大正期の諸相を詳述、IV と V で昭和元年からロッシーニ没後 100 周年の昭和 43 年に至る歩みを明らかにしたい。

I. 前史と明治期におけるオペラ受容の概略

外国人演奏家によるオペラ導入と初期の曲目

文政 3 年の旧暦 9 月 24 日(1820 年 10 月)、長崎の出島でオランダ人の上演された歌入り芝居《二人猟師乳汁売娘》が日本初のオペラ上演と推測されている(原曲が 18 世紀イタリアの作曲家 E.ドゥーニの《2 人の猟師と牛乳売り娘》であることは、中村洪介氏によって確認された)¹⁾。その後もなんらかの歌入り芝居の上演された可能性もあるが、資料で確認しうる最古の上演は明治 3 年(1870 年)9 月 28 日、横浜中華劇場の居留民アマチュアによるサリヴァン《コックスとボックス》となる。

ほどなく外国人居留地の演奏とは別に来日歌手によるコンサートが行われ、明治 8 年(1875 年)に来日したイタリア人ソプラノ、パルミエーリ夫人(Maria Palmieri,?)とその妹でメゾソプラノのペルシアーニ(Alice Persiani,?)が演奏会を行った。パルミエーリ夫人は夫のピアノ伴奏と妹の共演で同年 9 月 13 日から 10 月中旬までの間にゲーテ座で 4 回(9 月 13 日、20 日、27 日、10 月 4 日)、続いて複数のコンサートを衣装と演技付きで行い、皇居で御前演奏も行った。その初日(9 月 13 日)の曲目に「清らかな女神よ」「トゥーレの王」「宝石の歌」、《トロヴァトーレ》第 1 幕の aria があり、他に妹による「今の歌声」、パルミエーリ氏による《マルタ》の aria、姉妹による《ノルマ》の二重唱も歌われた²⁾。これは資料で確認しうるイタリア・オペラの楽曲の日本初演奏と思われる。

続いて同年 10 月にロシア人メゾソプラノ、D.M.レオノーヴァ(Dar'ya M.Leonova,1829 [または 1834]-96)が来日し、10 月 28 日に横浜の町会所(市役所に相当)で演奏会を開き、ドニゼッティ《ルクレツィア・ボルジア》の aria 2 曲と《ラ・ファヴォリータ》の二重唱その他を演奏した(二重唱はアマチュアのジェントルマンとの共演)³⁾。パルミエーリとレオノーヴァはそれぞれ大劇場で活躍した一流歌手であるが、以後明治末期まで重要オペラ歌手の来日演奏は行われなかった。

オペラ団の来日は明治 9 年(1876 年)4 月 19 日から横浜のゲーテ座で公演したロネイ・セファス喜歌劇団(L'Aunay-Cephas Buffo Opera Company)が最初で、4 人程度の歌手とピアニストからなり、オフエンバックの《ペリコール》《青ひげ》《美しいエレヌ》その他を上演したが、演目にイタリア・オペラは含まれなかった⁴⁾。

より人数の多いのは明治12年(1879年)に来日したヴァーノン歌劇団(Mr. H.Vernon's Royal English Opera Company)で、6月7日から横浜ゲーテ座にて《ジェロルSTEIN大公妃殿下》《マルタ》その他の作品を、主要歌手8名、少人数の楽団と2台ピアノの伴奏で上演した。イタリア物は7月1日に上演したドニゼッティ《連隊の娘》が唯一であるが、配役にマリー、侯爵夫人、トニオ、シュルピス、伍長、公爵夫人、ホルテンティウス、公証人に該当する役名があることから本格的な上演と思われる(但し、英語歌唱)⁵。このヴァーノン歌劇団は横浜山手公園でプロムナード・コンサートも行い、その第3回(7月29日)に《トロヴァトーレ》ミゼレーレの三重唱、第4回(8月5日)にコンサート形式で管弦楽の伴奏による《トロヴァトーレ》ミゼレーレほかを演奏した。この第4回は、「日本で初めてオーケストラ伴奏によるヴェルディのオペラの一部が演奏されたことが特筆される」(『日本のオペラ～1952』29頁)。同年文部省に音楽取調掛が開設され、音楽教育の組織化がはかられた。

ヴァーノン歌劇団は、続いて来日したハールマン夫妻(妻はソプラノ、夫はピアノ)を交えて明治12年9月に新富座でオペラ公演を行ったが、一般の観客の不興をかった。原因は観客が外国人歌手の演奏を「まるで鶏がしめ殺されるようだ」と受け止め、聴きどころの部分で爆笑が起きたからである——「日本人大衆の鑑賞心は、西欧の聴衆と全く正反対であることを示している。ちよびりした仕出し役をやらせてもらっている若い団員の声や動きに対し、息詰まるような沈黙を以て心をうっとりさせ聞き入るのに対し、プリマドンナの最も感動的な音符のところ、ドッと大きな笑い声が起こるのだ」(『The Japan Weekly Mail』9月7日付)⁶。ハールマン夫妻は10月9日に横浜ゲーテ座で《トロヴァトーレ》を抜粋演奏したが、これは演技付きの可能性があるといる。

明治14年(1881年)にはイタリア王立座(Royal Compagnie Italienne)と名乗るグループ(歌手3名と奏者1名)が来日し、3～4月に横浜ゲーテ座その他でコンサートを行った。曲目には「いとしいフェルナンドよ」「ロジーナの詠唱」「清きアイーダ」、《仮面舞踏会》の三重唱が含まれ、優れた歌手もいて高い評価を得た。

その後も明治の半ばまでさまざまな歌劇団が来日したが、演目の大半はオペレッタで、ヴェルディ作品は明治22年(1889年)来日のエイミー・シャーウィン(Amy Scherwin)英国歌劇団が同年6月10日に横浜パブリックホールで演奏した《トロヴァトーレ》第3・4幕が唯一と思われる。続いて複数の歌劇団が来日しており、中でも明治39年(1906年)から15年間に12回来日したバンドマン(Bandmann)喜歌劇団が重要であるが、演目は英米のミュージカル・コメディであった。

明治36年(1903年)7月23日には東京音楽学校(東京藝術大学音楽学部の前身。明治23年開校)で《オルフェオイス》(グルック《オルフェオとエウリディーチェ》の日本語訳詞版)が上演され、日本人初のオペラ公演となった。これは学生有志による私的な催しで、5年後の明治41年に同校が計画した再演は、男女の芝居が風紀紊乱を招くと危惧した文部省の意向で中止に追い込まれた。当時の校長、湯原元一は文部省の圧力に反発し、「芸術教育と他の教育を一様に見る事は文部省でも考へねばならぬ」「歌劇中にも西洋の物を、直に日本で演じられないものもある、其取捨は学校でやる、決して舞台の上で、男女が接吻をやる様な事は採用せぬ」と語っている(『教育時論』明治41年5月25日、第832号)⁷。以後東京音楽学校では昭和7年の学校オペラを例外に、終戦後のある時点まで演技を伴うオペラの上演が許されなかった。

以上が前記2書から抽出したイタリア・オペラを中心にした明治期のオペラ受容の概略であり、題名表記も同書に基づく(但し、人名表記は一部変更)。けれどもこれを明治期のイタリア・オペラの楽曲演奏のすべてと見なすのは誤りである。次に、器楽も含めた事例を明らかにしてみよう。

II. 明治期の公開演奏会におけるロッシーニの楽曲演奏

明治維新後に来日した歌手やオペラ団の演奏は、長崎、横浜、神戸などの外国人居留地でのみ行われた。とりわけ明治20年頃までの公開演奏会は基本的に居留地の欧米人を対象にした催しであり、告知も英字新聞でなされ、巡業グループの特別な来演を除けば演奏者もアマチュア在留外国人であった。突出しているのが横浜/東京で、本稿もこれを中心に情報を抽出するが、Iに挙げた明治20年までの情報の補完として、塩津洋子による明治期神戸のピアノ演奏記録とその分析——「明治期神戸のピアノ演奏記録」「明治期神戸のピアノ演奏記録」(『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』第26巻、2011年と第27巻、2012年)⁸から、ロッシーニ作品演奏の事例を拾っておこう。

「明治期神戸のピアノ演奏記録」によれば、明治19年(1886年)末までに神戸で行われたピアノの公開演奏は21例あり、その最初が明治4年3月19日(西暦1871年5月8日)、Eureka Variety Troupe [ユーリカー座]によるGymnasium Theatre [体育館劇場]の演奏会でピアニスト兼歌手 Alfred Singer が演奏した「Selections (Tancredi)」である。つまりロッシーニ《タンクレーディ》抜粋が、「内外人を問わず神戸でのピアノ演奏の最

初」⁹なのである。明治 19 年末までの神戸では曲目不詳を含めて 44 曲が演奏されており、最も数の多いロッシーニは次の 5 曲が演奏されていた（会場はすべて体育館劇場）。

明治 4 年 3 月 19 日（西暦 1871 年 5 月 8 日）：Selections (Tancredi) : Alfred Singer [《タンクレーディ》抜粋 Alfred Singer によるピアノ]

明治 16 年（1883 年）4 月 12 日 : G. Rossini: William Tell (Pianoforte duett) :? [《ウィリアム・テル》2 台ピアノ]

明治 17 年（1884 年）2 月 21 日 : Rossini: Barbier von Sevilla (Duet for 2 Pianos) :? [《セビーリャの理髪師》2 台ピアノ]

明治 18 年（1885 年）2 月 6 日 : Rossini: Overture de l'Opera L'Italiana in Algeri: Gentleman Amateurs [《アルジェのイタリア女》序曲 アマチュアの紳士によるピアノ]

明治 19 年（1886 年）7 月 26 日 : Rossini: Overture to "William Tell" arranged for the Piano by Lucksyone: Isidore Luckstone [《ウィリアム・テル》序曲 ラックストーン[?] によるピアノ編曲]

第 2 位はヴェーバーの 4 曲（「舞踏への勧誘」「魔弾の射手」序曲を含む）¹⁰、リスト 3 曲、ショパン 2 曲で、モーツァルトとベートーヴェンの作品は演奏されなかった。アマチュアを含む演奏であることから娯楽性の高い楽曲が弾かれて当然でも、そのトップがロッシーニとは驚きである。外国人居留地のある神戸が洋楽受容の最前線であることは、居留地のない京都での最初のピアノ公開演奏が明治 23 年に在日外国人によって行われたことでも判る（神戸での日本人によるピアノ初演奏は明治 24 年であった）¹¹。その神戸において、ピアノによるロッシーニ作品が本来のピアノ音楽に先行した事実は、外国人居留地の特殊性とも関連するようだ。

しかしながら、明治期の日本人による洋楽演奏の中心は、官立音楽大学を擁する東京であった。明治 20 年 3 月頃までの日本人による演奏は、主に音楽取調所の卒業演奏会や東京音楽学校の卒業・校友会演奏会で行われたが、そこではオペラの楽曲が基本的にピアノ連弾やピアノ伴奏による独奏楽器の器楽曲として演奏され、声楽は明治 30 年までは合唱唱歌として歌われた（東京音楽学校の演奏会において「獨唱」の語が初めて使用されたのは明治 31 年で、以後従来の唱歌と区別して「獨唱歌」と「合唱」の語が使われた）¹²。

日本人のオーケストラによるロッシーニ作品演奏は、明治 20 年（1887 年）5 月 14 日に工科大学中堂で演奏された「ウイルヘルム、テルノ唱歌劇大序」（《ギョーム・テル》序曲）が最初と思われる。ヴェルディ作品は同年 7 月 9 日、音楽取調掛演習会での「トラビアータノ序部」で、僅かにロッシーニが先行したことになる。一般向けの公開演奏会はおおむね明治 30 年代に始まり、陸軍と海軍の軍楽隊や近衛軍楽隊がブラスバンド用に編曲した楽曲やオペラの序曲を演奏した。

そこで次に、明治 20 年から明治 45 年まで 26 年間の公開演奏会における日本人（一部外国人含む）のロッシーニ作品演奏を、秋山龍英編著『日本の洋楽百年史』（第一法規、1966 年）と三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』（日東書院、昭和 6 年）から抽出してみよう。なお、明治期には Rossini がロジニー、ロシニー、ロッシニ、ロヒー、ロシーニ、ロススイニ、ロッシニー、ロツシニーなどと片仮名表記され、ロッシーニはおそらく明治 30 年末に初めて使われた。

明治 20 年から明治 45 年までの公開演奏会におけるロッシーニ作品

註：（秋山龍英による見出し）と小見出し —— 該当記事や告知における時と場所の記載 —— 演奏者、曲目、作曲者など。作品名と作曲者は太字で示す。[] 内は演奏者または水谷による注記、もしくは三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』その他の文献からの引用と出典。なお、秋山龍英『日本の洋楽百年史』は基本的に旧字体（旧漢字）を新字体（新漢字）に置き換えている。それゆえ旧字体の他文献との間に異同があるが、ここでは各文献の表記どおり転写し、文献間の顕著な異同を注記した。

1887 年

（明治二十年五月三十一日『大日本教育会雑誌』第五十六号）日本音楽会 —— 五月十四日午後八時半ヨリ工科大学中堂ニ於テ奏楽アリ —— 第一部（一）**ウイルヘルム、テルノ唱歌劇大序**

（明治二十年七月十五日『教育時論』第八十一号）音楽取調掛演習会 —— 上野音楽取調掛にては去る九日音楽演習会を催されたり —— 第一部 五 **洋琴 セビラノ理髪工** 独弾**ロジニー**作 林 蝶子

1892 年

(明治二十五年六月『音楽雑誌』第二十一号) 日本音楽会第十五回演奏会 —— 去る四日午後四時より其第十五回を後楽園内に開かる当日は〔中略〕演奏場は園内の広場たり —— (6) は近衛軍楽隊(ロシニー) 楽曲の序を奏せり [註: 三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』(日東書院、昭和6年。228頁の記載は「六、吹奏楽 ロシニーの序 近衛軍楽隊」)]

1893年

(明治二十六年十月『音楽雑誌』第三十七号) 雅楽所楽友会 —— 宮内省式部雅楽所の同会は九月三十日午後二時より富士見町五丁目雅楽稽古所に於て開会 —— 第七 吹奏楽「セウイラ」名地の剃髪者アリーの曲(東儀俊竜氏コルネット) [セビーリヤの理髪師のアリアのコルネット編曲と推測]

1896年

(明治二十九年八月『音楽雑誌』第五十九号) 音楽学校卒業式 —— 上野公園音楽学校には七月十一日卒業証書授与式を挙行せられたり —— 第五 ピヤノ(二人連奏 専修部卒業生 河野虎雄 片岡亀雄) オーベルツレー、ツール、オーベル、エリザベット [イングランド女王エリザベッタ序曲] ロッスイニ氏作曲

1897年

[明治三十年五月廿九日、高師附属上野音楽学校奏楽堂の慈善音楽会の第1曲にアレキサンダー及ヴェール女のピアノ連弾で「エル、イタリヤナ、イン、アルグリ [アルジェのイタリア女]、ロツシニー作曲」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』405頁]

1899年

[明治32年3月11日、東京音楽学校奏楽堂の明治音楽会にて、モリソン夫人が「今の歌声」を歌った。『日本オペラ史～1952』72頁]

1901年

(明治三十四年六月二十四日『読売新聞』) 明治音楽会評 —— これは去る土曜日本郷中央会堂の会である。〔中略〕有名なロシニー作のオペラ「ゼビルラの理髪師」の一節は管絃六部の合奏で紹介せられた。初のオーボイとフルートはよく合い、殊にクラリネットの婉転たる旋律もよく吹きあらはされて、クラリネット独奏と言ってよいからぬ。最後の壮快なる行進曲はこれまた毎々聞くものである。

1902年

[明治三十五年七月五日午後三時、東京音楽学校の奏楽堂で行われた同校卒業演奏会にて、「クラリネット獨奏(絃樂伴奏) カンタビレ ロツシニ作曲」を専修部卒業生、中村忠雄が演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』424頁]

1904年

(明治三十七年五月『音楽新報』第四号) 恤兵野外音楽会 —— 五月二十一日午後五時半 小石川植物園 —— 第一部 一 吹奏楽 陸軍軍楽隊諸氏 ロシニー ウーヴェルチュール ギイヨイム [ギョーム・テル序曲]

[明治三十七年五月二十九日午後一時、小石川植物園の恤兵野外音楽会の第一曲に陸軍々楽隊が「吹奏楽 ウーヴェルチュールギイヨイム [《ギョーム・テル》序曲]、ロシニー作曲」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』455頁]

1905年

[明治三十八年八月一日、日比谷音楽堂の開堂式に続く第1回演奏会にて永井健子指揮の陸軍戸山学校軍楽隊が、「大序 ギイヨーム、テル ロシニー作」を演奏した。この記念すべきオープニング・コンサートに関して三浦俊三郎は、「二部第二の大序はウイリアムテルの序曲である。平和克己復の情爽たる夕、斯かる快適な新設備の場所に於て自由に斯る美しいメロディーに陶醉する事を得たのは切實に聴衆の感激を興起し萬歳聲裡に閉会した。軍楽隊員は五十餘の大編成で、服装は未だ戦時気分を脱し得ず武装して居たので一部の非難もあつたやうである」と記している。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』373頁]

1906年

[明治三十九年九月二十九日、日比谷公演海軍奏楽にて、「歌劇セミラミス女王序曲 [セミラーミデ序曲] ロツシニー作」を演奏した。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』379頁]

(明治三十九年十月一日『東京日日新聞』) 日比谷の演奏評 —— 二九日の午後四時半と言ふに一週延期たる海軍軍楽隊の演奏は楽長吉本光蔵氏指揮の下に開始されたり —— △歌劇「セミラミス女王」序曲 ロツシニー作 アツシリアの女王セミラミスが波斯 [ペルシア] 及阿弗利加 [アフリカ] を征服せるを伊太利革命時代に脚色したるものなるが伊太利脚色のこととて艷麗言ふばかり無きに殊にコルネットの入れ方や高過ぎてメゾソプラノが耳に付きしも却つて聴衆には大受けなりき

(明治三十九年十一月七日『東京日日新聞』) 日比谷の演奏 —— 来る十一日午後二時より四時迄(当日雨天なれば十八日) 海軍々楽隊楽長吉本光蔵氏の指揮下に催さるる日比谷公園音楽堂の曲目は —— 第二部 六 歌劇「ウイヘルム勲歌曲ム、ペル」序曲 [ギョーム・テル序曲] (ロツシニー作)

(明治三十九年『音楽新報』十二月号) 同志倶楽部演奏会 —— 十月二十八日午後一時より和強楽堂に於て開会曲目左の如し —— 七、絃樂合奏東京音楽会演奏部員 ウキリアム、テル

1907年

[明治四十年六月九日、日比谷公演奏楽、永井陸軍々楽長指揮にて「大序プリユスキノ [ブルスキノ氏序曲] ロシニー作」を演奏した。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』385頁]

(明治四十年『音楽新報』一月号) 楽友倶楽部演奏会 —— 客年十二月二十二日青年会館にて催せる同会曲目左の如し —— 一二、合奏 部員 甲、**ウキリアムテル** ロヒー作曲

1908年

(明治四十一年四月十二日『時事新聞』) 日比谷の演奏 —— 十二日午後三時より永井陸軍々楽長指揮の下に演奏すべき曲目は左の如し —— 第二部 七、**序曲タンクレード** ロシニー作

(明治四十一年六月『音楽界』第一卷第六号) 日比谷の演奏 —— 十二日午後三時より陸軍々楽長永井健子氏の指揮下に演奏せし曲目は左の如し —— 第一部 五、**歌劇セビールの理髪師** ロシニー作

1909年

(明治四十二年五月『音楽界』第二卷第五号) 日比谷の演奏 —— 四月十一日午後三時より日比谷奏楽堂に於て永井軍楽長の下に演奏せし曲左の如し —— 第一部 五 **ギユイヨーム (ウイリヘルム) テル劇中の行進** ロシニー作 [三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』705頁は(ウイリヘルム)ではなく(ウイリヤ)と表記]

(明治四十二年四月二十四日『時事新聞』) 日比谷の演奏 —— 来る廿五日(第四日曜日)午後三時より同五時迄日比谷公園音楽堂に於て横須賀海兵団派遣軍楽隊海軍々楽長瀬戸口藤吉氏指揮の下に演奏あり曲目左の如し(雨天繰下) —— 第一部 二 **大歌劇ウイリヘルムテル序曲** ロジニー作

[明治四十二年六月五日、神田青年會館で行われた學生聯合音樂會にて、大塚音樂會(高師)がロシニー作曲の「春の怨」と「虹の歌」(註:共に該当曲不明)を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』707頁]

(明治四十二年九月九日『東京朝日新聞』) 日比谷の演奏 —— 来る十一日(土曜日)午後七時より同九時迄日比谷公園音楽堂に於て演奏を施行、曲目左の如し(尚雨天の節は翌日曜日に繰下) 陸軍戸山学校軍楽隊 永井健子指揮 —— 第二部 六、**カヴァチース** コルネット独奏 ロシニー作 [明治四十二年九月十一日……「カヴァチース コルネット独奏 ロシニー作」。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』711頁]

(明治四十二年十月『音楽界』第二卷第十号) 日比谷の演奏 —— 九月廿五日(土曜日)午後七時より同九時迄日比谷公園音楽堂に於て横須賀海兵団派遣軍楽隊軍楽長瀬戸口藤吉氏指揮の下に演奏せし曲目左の如し —— 第一部 四、**スタバマーデル讃歌曲** [スタバト・マーテル] ロシニー作

(明治四十二年『音楽界』十二月号) 早稲田音楽会 —— 同会第四回演奏会は[十一月]二十三日午後六時より神田青年会館にて開催せらるる其曲目は左の如し —— 第二部 絃楽合奏 (**ウキリアム、テル**)

1910年

(明治四十三年『音楽界』第三卷第六号) 日比谷の演奏(陸軍戸山学校軍楽隊) —— 四月廿四日日曜日午後三時より同五時迄日比谷公園音楽堂に於て演奏せる曲目左の如し —— 第一部 三、**歌劇「セビール」の理髪師幻想楽** ロシニー作

[明治四十三年六月五日「好楽会」主催第二回演奏会(有楽座) —— 柴田環がロシニーの歌劇『セヴィリアの理髪師』からの詠唱を独唱。註:『明治文化史9 音楽演藝編』(洋々社、昭和29年)611頁。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』717頁は「歌劇 **バルベル中のアリア** ロッソニー作」とする]

[明治四十三年十月十六日と十七日、東京音楽學校學友會演奏會(同校奏樂堂)にて「獨唱 中島かね **セミラミス** [セミラーミデ] **中のカヴァティナ** ロッソニー作」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』720-21頁]

(明治四十三年十二月十日 日比谷公園音楽堂) 日比谷の演奏 —— 遺英軍楽隊楽手団 指揮者 永井 健子 —— 第一部 二、序楽 **アルジェールの伊太利人** ロシニー作 三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』722頁は「ロシニー作」とする。

1911年

[明治四十四年一月四日午後六時、青山學院青年會主催、歐洲樂演奏會(同院講堂)にて「**ウキリヤム、テル 序曲** ロシニー作」が(おそらく遺英戸山樂隊により)演奏された。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』725頁]

(明治四十四年三月二十五日 東京音楽學校) 東京音楽學校第二十二回卒業演奏 —— 獨唱 声楽卒業生 岡見メリーモリス **カヴァティナ** ロススイニ作曲 [三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』655頁では、「二、獨唱 聲樂部卒業生 岡見メリーモリス **カヴァテナ** ロッソニー作」]

(明治四十五年五月『音楽』第三卷第五号) [註:以下は前年の演奏会の記録] 音楽奨励会第十回演奏会 —— 三月二十六日午後七時より華族会館に於て音楽奨励会第五(十)回演奏会(声楽会)開催せられたり。曲目左の如し —— 第一部 四 **ラ、ガッツァ、ラドラ** [泥棒かささぎ] の**アリア** 林豊子 **ロシニー**作曲 第二部 七 **セミラミス** [セミラーミデ] **中のカヴァティナ** 林豊子 **ロシニー**作曲 一〇、獨唱 中尾竜子 **バアピーア、フォン、セヴィラ** [セビーリヤの理髪師] **中のカヴァティナ** **ロシニー**作曲

[明治四十四年五月三日、東京音楽學校學友會女子部の旅行團の演奏會(桐生の高等女學校)にて「獨唱(高音部) 青山浪子 **バルビエル中のカヴァティナ** **ロッソニー**作」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』738頁]

[明治四十四年五月二十日、海牙デー祝賀音樂會(帝国ホテル)にて「高音部獨唱 柴田環子 **ロジエナのカヴァティナ** **ロッソニー**作」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』738頁]

[明治四十四年六月三、四日 雅樂及洋樂の演奏會の第二部歐洲樂にて「管絃樂 **オーヴァチュアー ウイリアム、テル** [ギョーム・テル序曲] **ロッソニー**作」が演奏された。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』741頁]

(明治四十四年七月『音楽世界』第五卷第七号) 明治音楽界の改組 —— [註: 明治音楽会が組織を改め、戸山学校及び陸軍々楽隊を編入] 大合同の試演第一回は七月一日午後七時より神田青年会館にて催せし筈なるが、指揮者はドヴラウイツチ氏及び永井楽長の二人にて、出演者総員四十二名あり —— 管絃楽には「ウキリアムテル」の序曲 [七月一日 明治音楽会第五十五回演奏会 (神田青年會館) にて「管絃楽 歌劇ウイリヤムテルの序曲 ロシニー作」。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』748頁]

(明治四十四年十月『音楽』第二卷第十号) 日比谷奏楽 —— 九月廿三日午後七時より九時まで、日比谷公園にて陸軍々楽隊は隊長永井健子氏指揮の下に左の演奏をなしたり —— 六、セビール理髪師の大序 ロシニー

(明治四十四年十月八日午後一時半 共立女子職業学校) 楽声会創立十二年記念音楽演奏会曲目 —— 九、高音独唱 岡見メレー子 パルビエール ロシニー作曲

[明治四十四年十一月廿六日、日比谷公園奏楽にて陸軍々楽隊が「序楽 アルジュールの伊太利人 ロシニー作」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』755頁]

1912年

[明治四十五年五月十八、十九日、東京音楽学校學友會演奏會 (同校奏楽堂) にて「高音獨唱 菌部ふさ子 歌劇イバルビエーレ、デイ、シヴイリア中の咏嘆調 [セビール理髪師のアリア] ロシニー作」を演奏。三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』764頁]

(明治四十五年八月『音楽』第三卷第八号) 東京音楽学校第一回土曜演奏会 —— 七月六日本校講堂に於て、学友会第一回土曜演奏会を催ふせり。其の曲目左の如し —— 第一部 二、中音独唱 竹内うめ子 歌劇「セミラミス」中の咏嘆詞 第三部 十、声楽二部 菌部ふさ子 船橋栄吉 歌劇「パルビエーレ、デイ、シヴイリア」中の二部 [二重唱] ロシニー作曲

以上、明治期のロシニー演奏の事例を編年体で提示したが、作曲家と作品の表記がバラバラなのは当時の音楽界に何の基準もなく、執筆者ごとに表記が異なるのが原因である。この問題は洋楽の普及が加速した明治末期に浮上し、明治41年12月の『音楽界』第1巻第12号では同誌における用語統一とその普及を目的に、原語と訳語を併記した一覧表を掲載している。そこではオペラ関係の訳語が次のように提案されている (主なそれを、原語と訳語を逆にして引用する)¹³—— 「Ouverture = 序楽、Opera = 歌劇、Musikdrama = 楽劇、Opéra Comique = 喜歌劇、Opera buffa = 滑稽歌劇、Opérette = 小歌劇、Grand Opera = 純歌劇、Aria = 咏嘆調、Recitativo = 宣叙調」

この中には現在も流通する訳語が含まれるが、咏嘆調や宣叙調のような死語も少なくない。ちなみにオラトリオを「神事楽」、ミサ曲を「供養歌」とするなど、工夫の跡が見て取れる。こうした試行錯誤もあって、続く大正～昭和初期に人名と音楽用語の標準表記が徐々に固まるのである。

明治期のロシニー演奏の批評、あらずじ紹介

日本人歌手が公開演奏会でロシニーのアリアを初めて歌ったのは明治43年6月5日、有楽座における好楽会主催第2回演奏会の柴田環 [後の三浦環]¹⁴と思われる (曲はおそらく「今の歌声」)。

翌、明治44年3月25日には東京音楽学校の第22回卒業演奏で岡見メレーモリス (正しくは岡見メレー) がカヴァティナ [カヴァティーナ]、同年10月8日には同じ岡見メレーが《パルビエール》の独唱曲を歌っており、どちらも「今の歌声」と推測しうる。そして『読売新聞』に掲載された次の卒業演奏評が、日本人のロシニー歌唱に関する最初の批評となる。

岡見嬢は今年の優等生だ [。] 以前此曲は左程の難解でなく寧ろテクニックを主としたものらしい、同嬢の伊太利亜語の発音は中々明瞭で音色も美しく本曲の最大条件たるテクニックも可成の出来だが之より静かなメロディーを唱ふとき却って調子が外れて高くなつた様に聞えた。最後に漸次テンポが速くなり、音が強くなる所謂アツチエラントに終る部分は尚一層幅があり力のある強い声を出して欲しかった [。] ペッツォール夫人の伴奏は絶妙、伊太利亜風に軽く聴かせたのは嬉しい [。] 同嬢独唱の半分は慥に夫人の援助に依ると思ふ。
(『読売新聞』明治44年3月28・29日付)¹⁵

岡見メレーは柴田環の後継者となるべく将来を期待されたが、若くしてがんのため入退院を繰り返し、大正3年3月7日に亡くなった¹⁶。

公開演奏会におけるロシニー歌唱の批評をもう一つ引用しておこう。明治45年3月26日に華族会館で行われた音楽奨励会第10回演奏会で林豊子の歌ったラガツツアラヅラ [泥棒かささぎ] のアリアと、中尾竜子の歌

ったセベイヤの髪剃り [セビーリヤの理髪師] のカヴァティーナに関する評である。

林嬢がロッシーニのラガツツアラツラは声量徒らに豊富なれども怒鳴るが如くまた熟せず [中略] 至極見すばらし [。]

最後のソプラノ中尾嬢のロッシーニがセベイヤの髪剃りは本日の圧巻にして声は微かに聞えしと覚ゆを初め妾が心配に傷きたりと続けリンドーロ刺されては百千の落窶と乱れ妾必ず勝んと結ぶ辺帝劇衆席を去りも得ず熱心なる拍手を続けて当夜唯一のアンコーラを強制したるは実に当夜のブリーマドンナなりき [。]

（『東京朝日新聞』明治45年3月28日）¹⁷

「今の歌声」は明治8年の初演奏以後、外国人歌手によって歌われたことから（例、明治32年のモリソン夫人）ロッシーニの名歌としてつとに知られ、明治末期にはソプラノのレパートリーとして定着していた。これに対し、コントラルトの声種がなお珍しかったことは「怒鳴るが如くまた熟せず」といった批評からも察せられるが¹⁸、この時点ですでに《泥棒かささぎ》や《セミラーミデ》の楽曲が歌われた事実は興味深い。

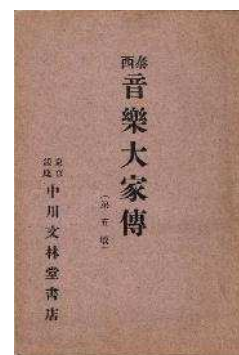
ならば、ロッシーニのオペラは明治期にどの程度紹介されていたのだろう。書籍のオペラ本は、安藤弘『歌劇梗概』（修文館、明治39年）と柴田環『世界のオペラ』（共益商社書店、明治45年）の2著があるのみである。安藤弘の『歌劇梗概』は英語のオペラ解説本（原本は Charles Annesley, *The Standard Opera Glass*, London etc., 1901.）の抄訳を中心に20作を紹介し、ロッシーニ作品は「ウ井ルヘルム・テル」のみを掲載している（文中の作曲者表記は「ギオアチノ・アントニオ・ロッシーニ」。ベッリーニとドニゼッティの作品は無く、ヴェルディは《リゴレット》のみ紹介）。柴田環『世界のオペラ』は原本不明ながら70のオペラのあらすじを紹介し、ロシニイ [ロッシーニ] の《シビラの理髪師》、ペリニー [ベッリーニ] の《ノルマ》、ドニゼッティ [ドニゼッティ] の《ラムメルモールのルシア》《聯隊の娘マリヤ》、ヴェルディの《リゴレット》《アイダ》《ラ・トラビアタ》《トルバドウル》が含まれる。《シビラの理髪師》はロジーナをロシネー (Rossine) と誤記しているが、原本のあらすじを翻訳するだけではなく柴田自身の脚色や個性的な表現のあることは、次の冒頭だけでも明らかであろう。



柴田環『世界のオペラ』（共益商社書店、明治45年）

ロシネーは妖艶花を欺く計りの美人である。さればロシネーに思を焦して居る者は数知れぬ、其中でも殊に熱烈なのが二人。一人はロシネーの禿頭翁バルトロで、他の一人はアルマビバ伯爵である。¹⁹

しかしながら、この2書は作曲者に関する伝記的記述が無きに等しく、あらすじ本の域を出ない。それゆえロッシーニについてのまとまった紹介は、最初の大作曲家列伝に見出せる。それが明治40年12月に出版された『泰西音楽大家伝』である（細貝邦太郎 / 有沢潤 編。中川書店）。同書は「シャープ氏の作曲大家列傳、大英百科全書等二三に基きて編纂」（序）し、基本的には英文で書かれた文章の翻訳と理解でき、パレストリーナからヴァーグナーとグノーまで29人の略伝で構成され、ロッシーニはフルネームを「ギオアチノ、ロシニー」と表記し、336～354頁の全19頁を費やしている。その前置きではドイツ楽派から軽佻浮薄と批判されたとしながらも、バッハ、モーツァルト、ハイドゥン、ベートーヴェン、ウェーバーと並ぶ異彩として高く評価している点が注目に値する。



『泰西音楽大家伝』（中川書店、明治44年[第5版]筆者所蔵）

続く大正期には後述する大田黒元雄『歌劇大観』や来日歌劇団の『筋書』などさまざまなオペラ解説書が登場するが、ともあれ明治期のオペラ受容は、前記のような状況下に行われたのである。

III. 大正期のロッシーニ上演とその諸相

明治45年7月30日、明治天皇の崩御により元号が大正に改まり、しばし歌舞音曲自粛となった。9月には帝国劇場が興行を再開し、同年（大正元年）10月末には師サルコリに伴われて上海のビクトリア劇場に出演していた原信子が帰国した。11月12日の『都新聞』は、同月17日横浜角力常設館にて帰国する東京音楽学校雇教師

ユンケル氏の最後の大演奏会が予定され、「此程上海より帰朝せる問題の人原のぶ子はロシニー作のバルビール、シビリヤ及びアバマリア等得意の技を演ずべし」と報じたが²⁰、実際に演奏されたかどうかは不明である。12月14日には東京音楽学校の学友会第3回土曜演奏会が催され、永井いく子が「イル・バルビエーレ、デイ、シヴィーリエ 中ノ絃情調 [セビーリヤの理髪師のカヴァティーナ]」を歌っている（『音楽』第4巻第1号、大正2年1月）²¹。

前記のように、明治40年代以後、公開演奏会における声楽演奏の機会が増大した。それゆえ楽曲単位の演奏に関する記述はここで止め、大正期に活性化する民間オペラ興行とそのロッシニー上演に話を移したい。

ローヤル館と最初のロッシニー上演

日本で最初のロッシニー上演となるのが、大正6年(1917年)11月13日に赤坂のローヤル館で上演された《シキ^キルリアの理髪師 [セビーリヤの理髪師]》である。ローヤル館は、帝国劇場歌劇部の指導者に求められて大正元年(1912年)に来日したイタリア人バレエ振付師ジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ロージ (Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?)。日本ではローシーもしくはローシと称される)が大正5年(1916年)5月に帝国劇場との契約を解消され、その資財を投じて設立した劇場で、「大正5年10月1日に、赤坂紀尾井町の映画館万才館を大改装して開館し、「場内に外国式の飲食の設備を設け」たが、当時の法令で劇場新設が困難なことから「寄席として許可を取ったため、オペレッタの前に奇術とか講談のようなものを加えなければならなかった」。それでも「オーケストラは20名以上いて帝劇を上回り」「オペレッタの名作を小林愛雄の訳詞、斉藤佳三の美術でほぼ原曲どおりに1日から25日まで続演して、あとは稽古という良心的な興行」であった²²。

ローヤル館の《シキ^キルリアの理髪師》に先立ち、イタリア・オペラの本格的な上演がローシー時代の帝国劇場で行われていた。大正3年(1914年)2月1日のドニゼッティ《聯隊の娘 [連隊の娘]》(第1幕のみ。25日まで続演)と、同年11月26日のベッリーニ《夢遊病 [夢遊病の女]》(3場。25日まで続演)である。どちらも原信子とバリトンの清水金太郎が主演し、台本はレチタティーヴォを台詞に置き換えた小林愛雄の訳詞が使われ、《夢遊病》はその批評に「現代語の文語調」を使ったことから「全体の調子がいかにもなだらかで、向ふの曲調に無理にとつて付けたやうではなく歌詞に旋律を付けたやうに聞こえたのは、氏の経験の豊富と、苦心の結果とであらう」と絶賛されている。歌手と歌唱についても、「清水金太郎氏の入った舞台は聴衆に快感を与へるのは確かだ。只氏の音量が小さくなつたやうに思はれたのは何うした理由であらうか」「原信子嬢の歌は相不変綺麗で器用である」と書かれている(千栄生・筆。『音楽界』第158号、大正3年12月)²³。

ロージ率いる一座は、ローヤル館で大正5年(1916年)10月から大正7年(1918年)2月までの1年5ヶ月間に、オッフェンバックの《天国と地獄》《美しきヘレナ [美しいエレーヌ]》《ボッカチョ》《ブム大将 [ジェロルステイン大公妃殿下]》ほか、さまざまなオペラを小林愛雄の訳詞で上演した。特筆すべきは大正6年(1917年)10月1日の、マスカーニ《カワ^カレリア (カヴァレリア)・ルスティカーナ》原語上演である(サントウツア：原信子、トゥリッドゥ：田谷力三、アルフィオ：清水金太郎)。

前記《シキ^キルリアの理髪師》日本初演はその翌月に同じメンバーで予定され、11月1日が初日のはずが11月3日と告知されたのは稽古中にロージと指揮者の石川太郎が喧嘩し、負傷した石川が退団したのが原因とされている。そして警察がかつらを着けた芝居の中止命令を出したため、土壇場で3日の初日も流れてしまった。11月3日付『東京朝日新聞』はこの件を、「曩(さき)に警視庁保安部より観物取締規則を公布して劇場と寄席との区別をした同規則に依ると寄席で鬘(かつら)を着して芝居類似の観物興行を禁じてあるにも拘らず近来尚依然として娘コミックの如き小芝居を演じ盛に風儀を乱してゐるので数日前より警視庁保安部より各署へ命じて爾今寄席で鬘を着して演ずる観物を禁止する旨を伝達せしめた」と報じている²⁴。

結局ロージと原信子が警察に陳情し、「ローシー・オペラ・コミック」を「ローシー・オペラ」と改名することで特別に許可を得ることができた(オペラ・コミックの名称が、警察が取り締まりの対象とした寄席の下品な娘コミックを想起させたようだ。前記新聞の見出しも「娘コミックの禁止」である)。その結果、初日は11月13日にずれ込んだが、奇しくもその日はロッシニー没後49年目の命日に当たっていた。これは小林愛雄の訳詞、石川伊十郎の背景製作による上演で、指揮は退団した石川太郎に代わって東洋音楽学校(明治40年に創設された日本初の私立音楽学校で東京音楽大学の前身)出身の23歳の篠原正雄が務めた。配役は、ロシナ：原信子、ベルタ：清水静子、フィガロ：清水金太郎、伯爵アルマキ^キワ^ワ：田谷力三、医師バルトロ：堀田金星、フィオレルロ：清水静子、士官：尾崎氏で、フィオレルロとベルタ役を同じ女性歌手が務めた²⁵。

11月16日付『都新聞』掲載の批評は、次のように記している(白井嶺南・筆)。

今度の演じ方は、詠嘆調や宣叙調など主なる独唱は大抵原詞其儘であつて、聴き手にとり少なからぬ感興を起さしめた。[中略]最も面白くそして聴きごたへのしたのは原信子氏の『心の奥に秘めし我が声』[註：「今

の歌声」を指す]の独唱であった。『わが手を君に捧ぐる迄は、あゝ待ちわびて涙ぞ流るゝ……』と歌ひゆくあたり、引入れらるゝ心地した、同氏の声の明快で力の籠って居ることが著しく注意された、知らず此人はロシニーものに適せるか[。]

清水金太郎の独唱『理髪師の唄』は遠(さすが)に苦もなく表情も巧にやっつてのけた、併し嘗て同じ人の口から、原詞で聴いたことのある余は、何となく物足らず感ぜられ、是れにつけても一字一譜の日本語に訳する小林氏の苦心を察すると共に清水氏に対し気の毒に感ぜられた[。]

二部合唱[二重唱]では前記二氏の『それは真実か』の歌である、あの対話から歌にうつる呼吸や互ひに歌ひかはす小節のずっくり気が合ふて居る辺、如何ばかり清爽を覚えしか[。]

もっと振ふべかりし田谷氏は何時ものうま味を味はしてくれなかつた持役のせいかな静子氏は例の輪廓のはつきりした声を聴かしてくれなかつたので聊か淋しみを感じた[。]²⁶

この批評だけでは判然としないが、訳詞以外に原詞(イタリア語)で歌った曲もあったようだ。『音楽界』第199~201号(大正7年5~7月)掲載の河野良助「ローシーオペラ没落史」には、「原信子嬢のロシナはよく柄にはまった。然も『心の奥に秘めし我声』のところのソロは楽々と歌はれて快感を与へた。清水金太郎氏の理髪師は些か臭味があつたが中々發揮した」とある²⁷。

《カワレリア・ルスティカーナ》と《シキルリアの理髪師》はローヤル館が初めて満員の札を出す盛況であったが、翌月上演したオードラン《マスコッテ[マスコット]》では小林愛雄がロージの契約違反を非難して今後協力しないとの声明を出し、原信子も何らかの理由で出演せずに退団に至るといったトラブルを生じた。そして翌大正7年には清水金太郎・静子夫妻が去り、残ったメンバーが同年2月に行った《椿姫》日本初演(訳詞上演)を最後に、ローシー一座とローヤル館の歴史に幕が下ろされたのだった。

浅草オペラにおけるロシニー上演

かくして民間オペラの拠点は浅草に移る(以下、浅草以外の劇場も含めた大正期の民間オペラ興行全般を「浅草オペラ」と称して記述する)。ローシー・オペラがほぼ原曲どおりに訳詞上演したのに対し(但し、レチタティーヴォは台詞に置き換え)、浅草オペラの興行は抄演というよりも部分上演に近い形態で、素人同然の役者=歌手が日本語で歌った。例えば金竜館では芝居やヴォードヴィルなどと共に通例5~6演目が、昼の部と夜の部に分けて1日2回興行されていた。それぞれの部は正味6時間で、午前10時過ぎから夜11時くらいまで約12時間、ほぼ通して客の入れ替えなしに上演が続いたという。オーケストラの規模に関する証言に「7人くらい」とあるが、実際は5~6名から15名程度と幅があり、編成はヴァイオリン、ヴィオラ、コントラバス、クラリネット、ピアノで若干の金管楽器も加わったようだ。伴奏もピアノ譜から小編成の楽団に合わせて適当にアレンジし、「耳に親しい歌だけを適当に集めて編曲するのが通常のスタイル」であった²⁸。

大正期の民間オペラ興行とその演目は増井敬二『日本のオペラ』付録61-69頁の「名作歌劇上演一覧表(帝劇, ローヤル館, 浅草オペラ)」にまとめられており、人気上位の3作がスッペ《ボッカチョ》、オードラン《マスコット》、プランケット《コルスヴィルの鐘》と判る。ヴェルディは《椿姫》《リゴレット》《トロヴァトーレ》《アイーダ》が上演され、ベルカント物は《セビーリアの理髪師》、ドニゼッティ《愛の妙薬》《連隊の娘》の人气が高かった(《ランメルモールのルチーア》《ドン・パスクワレ》《夢遊病の女》も上演されたが、一館での一期のみ)。人気曲はセノオ楽譜(妹尾幸陽が大正4年に刊行開始)²⁹や愛音會(小林愛雄が設立。楽譜出版は大正5年から)などの新興楽譜出版社からピースの形で出版され、愛唱歌となった(他にも役者の挿絵と歌詞付きの旋律を印刷したものが絵葉書の形で制作され、ロシニーは大正7年に「ロシニー傑作セヴキラの理髪師」歌劇名曲集第七輯、全4枚がメロディー社から発売されている)。

浅草オペラにおける《セヴィラの理髪師》——以下、大正期の標準的邦題としてこれを用い、資料で明らかな別題を随時用いる——はローシー・オペラの楽譜が原本と思われ、ローヤル館での日本初演の翌年、大正7年(1918年)4月24日から原信子一座が観音劇場(東京歌劇座)で上演を開始した。大正8年(1919年)1月24日には清水金太郎と原信子の合同で駒形劇場の上演を開始し、同年4月30日から金竜館の七声歌劇団、8月31日から日本館でも演目にされている。ほどなく七声歌劇団は中核メンバーの清水夫妻、田谷力三、安藤文子らが新星歌舞劇団に移籍したため弱体化し、同年10月末から金竜歌劇団と合同して根岸歌劇団(発足時の名称は根岸喜歌劇団)と称して活動するとともに、大正9年(1920年)1月31日から金龍館で《セヴィラの理髪師》の上演を開始した



歌劇 セヴィラの理髪師の歌
(愛音會、大正6年。筆者所蔵)

(木村時子出演)。

一方、大正8年5月に誕生した新星歌舞劇団は、清水夫妻、田谷力三、安藤文子らの移籍で水準を上げ、四大都市を巡演して「名実共に日本一の歌劇団」となり、大正9年7月14日から横浜座で《セヴィラの理髪師》の上演を開始した。この新星歌舞劇団は松竹と関係を持っていたが、金竜館の引き抜きにより全員が根岸歌劇団に移籍したため同年8月末に消滅、根岸大歌劇団(根岸歌劇団)が誕生した。

以後、浅草オペラは金竜館を舞台に根岸歌劇団の独壇場となり、大正9年9月から12年9月1日の関東大震災まで3年間、黄金時代を築くことになる。その全演目は増井敬二『浅草オペラ物語』(音楽現代社、1990年)の付録に掲載されており、大正9年(1920年)11月18日(初日~同月28日)に《セヴキラの理髪師》(ロジーナ:安藤文子、フィガロ:清水金太郎、バルトロ:堀田金星)³⁰、翌大正10年8月2日(初日~同月11日)に「《バルビエ》の一節」、10月21日(初日~11月2日)に《セヴキラの理髪師》(ロジーナ:安藤文子、伯爵:町田金嶺、フィガロ:黒田達人、バルトロ:藤村梧朗)³¹、続く大正11年6月28日(初日~7月11日)と大正12年5月31日(初日~6月12日)にもこれを上演した(いずれも抄演)。

浅草オペラは大正12年9月1日の関東大震災によって壊滅的打撃を受けたが、大正13年1月22日から根岸歌劇団が早稲田劇場、同年6月9日から森歌劇団が浅草に急設されたバラック建築のオペラ館で《セヴィラの理髪師》の上演を始めた(森歌劇団は田谷力三や清水夫妻を含むメンバーで組織された)。しかしながら、浅草オペラは大正14年10月に事実上終了した³²。

なお、大正期には東京音楽学校の演奏会で同校オーケストラが「ウィリアム・テル」序曲を演奏したほか、陸軍、海軍、近衛師団の軍楽隊が公開演奏会でロシーニのオペラ序曲を演奏し、珍しい作品では「イタリアン、イン、アルゼリア[アルジェのイタリア女]」序曲が大正4年、「ブルッシノ[ブルスキーノ氏]」序曲が大正10年、海軍軍楽隊と近衛師団軍楽隊によって演奏された³³(但し、どちらの曲も明治期に演奏例あり。前記)。興味深いのは大正末期の軍楽隊演奏会に歌手を交えた例のあることで、大正15年10月2日に海軍軍楽隊が日比谷公演で行った演奏会に井上織子(ソプラノ)と田谷力三が出演し、それぞれ管弦楽の伴奏³⁴でオペラ・アリアを歌った(田谷の曲目に「セヴィラの理髪師の一節」が含まれる)³⁵。大衆向けの器楽編曲では、ハーモニカ用のピースが数多く出版されている。ハーモニカは当初輸入品であったが、明治43年に国産品の製造が始まり、大正期には「ハーモニカの父」と呼ばれる川口章吾(1892-1974)が複音ハーモニカを生み出し、その編曲による楽譜ピースを共益商社書店から出版した。大正12年開始のシリーズ「川口章吾編 ザ・モスト・ポピュラー・ハーモニカ・ピース」の第1編が「ゼビラノ理髪師」である³⁶。



ザ・モスト・ポピュラー・ハーモニカ
ピース 1 ゼビラの理髪師
(大正12年。筆者所蔵)

映画館に少人数の楽団(奏者は5・6人程度)を置いて洋楽を演奏したのも大正期からで、大正7年には銀座の金春館で管弦楽団が序曲や新しい舞曲を演奏して好評を博し、大正9年には松竹が全国の一流映画館に優秀な楽士を配属して映画音楽の高級化が行われた——「ウィルヘルムテル序曲」とか「アルルの女」とか「ペルギュント」とか云ふものが民衆の愛好を受けるようになったのは此の時からである」(堀内敬三)³⁷。

オペラ以外のロシーニ作品では、大正12年1月に東京音楽学校の《スタバト・マーテル》に列席した寺田寅彦が次の感想を記している——「ロシーニのスタバト・マーテルを聞きながら、こんなことも考えた。本当の基督教はもう疾うの昔に亡びてしまつて、ただ幽かな余響のようなものが、わずかに、こういう音楽の中に生き残っているのではないか」(大正12年1月『渋柿』)³⁸。

大正期の海外歌劇団来日による本格的なオペラ上演

浅草オペラは歌劇の大衆化に大きな役割を果たしたが、その一方で警視庁保安部が芝居もどきの娘コミックを取り締まるなど、風紀面で問題視された。役者の自由恋愛も取り沙汰され、歌手のゴシップや男女関係が新聞雑誌を賑わせた。浅草オペラの影響に関して増井敬二は、「酷いカットとか、安っぽい舞台、少数の下手な管弦楽と合唱、素人同然の歌や、下品な演技は、オペラというもののイメージを損じたに違いないし、その反動等が例えば東京音楽学校の正しいオペラへの着手を妨げたのかもしれない。しかし浅草オペラに従事していた多くの人は、常に意欲的に新しいものを信奉する芸術に挑戦していた」と総括している³⁹。

そうした問題とは別に、大正期は日本で初めてオペラの本格的上演が行われた時代でもあった。では日本の本格的なオペラ上演は、いつ、どこで、誰が行ったのか。それが大正8年に始まる露西亜大歌劇の来日と、続くカーピ伊太利大歌劇の来日公演である。大正期の両歌劇団の来日とその演目を、次に明らかにしてみよう。

◎第1回 露西亜大歌劇来日公演 (大正8年)

大正8年(1919年)の第1回露西亜大歌劇来日公演は、全41回の公演を東京、横浜、神戸、大阪、京都で行った(9月1日~10月9日)。上演作品は次の10演目である——ヴェルディ《リゴレット》(本格日本初演)、《椿姫》(本格日本初演)、《アイダ》(日本初演)。グノー《ファウスト》(日本初演)。ビゼー《カルメン》。ドリーブ《ラクメ》(日本初演)。プッチーニ《トスカ》(本格日本初演)。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》(日本初演。《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て)。ムソルグスキー《ボリス・ゴドゥノフ》(日本初演)。

この第1回露西亜大歌劇の来日は、歌手23名、管弦楽35名、合唱20名、バレエ・ダンサー4名、指揮者2名のほか舞台監督と複数の役員も同行した本格的巡業であった⁴⁰。ロッシェニ作品は含まれず、ヴェルディの《アイダ》《椿姫》《リゴレット》は事実上の日本初演——抄演や部分上演でない日本初演——と言って差し支えないが、ロシア語歌唱なので正式には外国語=ロシア語による日本初演となる。《アイダ》初日の批評は、「浅草あたりの小さなオペレットしか見てゐない我国人には、一日から帝劇に上演した露国グランド・オペラ団の来朝は寧ろ驚異である…舞台装飾の壮大なことゝ登場人物の多数とに驚きの眼を見争る(みはる)…アイダのソプラノの美音に魅せられた…ラダメス大尉のテノールに酔はされた」と、初めて本物のオペラを観た感激が記されている⁴¹。

◎第2回 露西亜大歌劇来日公演 (大正10年)

大正10年(1921年)の第2回露西亜大歌劇は《セビーリヤの理髪師》の本格日本初演と1作のバレエを含め、次の17演目が上演された(9月1日~11月19日。神戸、大阪、京都、東京、横浜、名古屋で合計67公演)——ロッシェニ《セヴィルの理髪師》(本格日本初演)。ヴェルディ《リゴレット》、《トロヴァトーレ》(本格日本初演)、《椿姫》《アイダ》。グノー《ファウスト》《ロミオとジュリエット》(本格日本初演)。ビゼー《カルメン》。トマ《ミニョン》(日本初演)。マスネ《タイス》(日本初演)。ダルゴムイスキー《ルサルカ》(日本初演)。チャイコフスキー《スペードの女王》(日本初演)、《エウゲニ・オネーギン》(日本初演)。プッチーニ《ボエーム》(日本初演)、《蝶々夫人》(本格日本初演)。レオンカヴァッロ《道化師》(バレエ《月下の愛》を併演)。メンバーは、ソプラノ6、メゾソプラノ4、テノール5、バリトン6、バス5の合計26名の歌手、バレエ7名、指揮者2名、合唱、管弦楽、役員ほかを含めた総員78名の大所帯である⁴²。

《セヴィルの理髪師》は9月23日の帝国劇場の昼公演と10月13日の有楽座の合計2回のみながら、日本で最初の本格的ロッシェニ上演となった。配役は、ロジーナ：カザンスカヤ、バルタ：ロシエーヴァ、伯爵：スヴェトノフ、フィガロ：グルレンコ、バルトロ：トゥルチノフで、すべてロシア語で歌われた。露西亜歌劇団の第1回41公演と第2回67公演の合計が108回、ヴェルディ作品の上演合計が30回にのぼることも特筆したい。

◎第1回 カーピ伊太利大歌劇来日公演 (大正12年)

続いて大正12年(1923年)にイタリア人カルピ(A.Carpini。フルネームと生没年不詳)率いるカーピ伊太利大歌劇の第1回来日公演が行われ、ベッリーニ《ノルマ》とドニゼッティ《ランメルモールのルチア》の日本初演を含む次の14演目が上演された(1月26日~2月24日。東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸で合計30公演)——ロッシェニ《セヴィラの理髪師》。ベッリーニ《ノルマ》(日本初演)。ドニゼッティ《ルチア》(日本初演)。ヴェルディ《リゴレット》《トロヴァトーレ》《椿姫》《アイダ》。グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。プッチーニ《ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》(《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て)。メンバーは、ソプラノ3、メゾソプラノ4、テノール4、バリトン3、バス5の合計19名からなり、指揮者1名、合唱、管弦楽を含めた総員50名である⁴³。

カーピ伊太利大歌劇初来日の宣伝チラシ(大正12年。筆者所蔵)

カーピ伊太利大歌劇は「上海、香港、マニラなどを巡業する歌劇団で、二流どころの相当な歌手をイタリアから招き、あとは東洋在留のイタリア人、ロシア人などの歌手で編成し」「管弦楽は十数人程度の外人混成団体（ピアノ入り）をつれて来た」という（堀内敬三『音楽明治百年史』⁴⁴）。

《セヴィラの理髪師》は2月4日の帝国劇場昼公演1回のみであるが、《ファウスト》以外はイタリア語歌唱であることから原語による日本初演となる。配役は、ロジーナ：デルザ、ベルタ：モランティ、フィガロ：ピガルド、バルトロ：ニコティである（他の歌手は調査中）。カーピ伊太利大歌劇の第1回公演に関して山田耕筰は、「絃七人、木管三人、真鍮〔金管楽器〕三人にピアノを加へた十四人の外人団故、歌劇の管絃楽として貧弱」「指揮者カスターニ氏にもう一段の優れた芸術的洞察と、指揮者としての配慮があつたならば」としながらも、「質に於いては露西亜歌劇よりはまさつてゐる」と2月4日付『時事新報』に記している⁴⁵。ここでカスターニ氏と書かれた指揮者はカルメロ・カスターニノ（Carmelo Castagnino,?-?）で、後述するカーピ伊太利大歌劇の第2回と第5回にも同行している⁴⁶。

◎第2回 カーピ伊太利大歌劇来日公演（大正14年）

2年後の大正14年（1925年）、カーピ伊太利大歌劇の第2回来日公演が行われ、次の15演目が上演された（3月1日～4月9日。東京、大阪、京都、神戸で合計38公演）——ロッシーニ《セビラ〔セヴィラ〕の理髪師》。ヴェルディ《エルナーニ》（日本初演）、《リゴレット》《トロヴァトーレ》《椿姫》《アイーダ》《オテロ》（日本初演）。グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。ポンキエリ《ジョコンダ》（日本初演）。プッチーニ《ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》（《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て）。メンバーは、ソプラノ5、メゾソプラノ3、テノール6、バリトン5、バス2の合計21名からなり、指揮者カスターニノと副指揮者、バレエ、合唱、管弦楽を含めた総員は70余名であった⁴⁷。《セビラの理髪師》または《セヴィラの理髪師》（告知やプログラムにどちらも使用）は3回上演されている（3月8日と15日の帝国劇場昼公演、21日の大阪宝塚中劇場）。配役は、ロジーナ：スリナク、ベルタ：バラリン、伯爵：ジレッタ、フィガロ：スカムッツィ、バルトロ：パテルナ、バジーリオ：ミロッキ、フィオレロ：チェザリ、軍曹：バロンティニで、この中で一流と見なしているのはフィガロ役のヴィクレッフォ・スカムッツィ（Vicleffo Scamuzzi, 1887-1955）である⁴⁸。



第2回『カーピ伊太利大歌劇 筋書』(大正14年。筆者所蔵)

◎第3回 カーピ伊太利大歌劇来日公演（大正15年）

翌大正15年（1926年）にはカーピ伊太利大歌劇の第3回来日公演が行われ、次の15演目が上演された（3月10日～4月13日。東京、大阪、京都で合計35公演）——ロッシーニ《セビラ〔セヴィラ〕の理髪師》。ドニゼッティ《ルチア》、ヴェルディ《リゴレット》《トロヴァトーレ》《椿姫》《アイーダ》《オテロ》。グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。マスネ《マノン》。プッチーニ《ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》（《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て）。メンバーは、ソプラノ5、メゾソプラノ5、テノール6、バリトン4、バス2の合計22名からなり、指揮者カントーニ（Cantoni）と副指揮者、バレエ、合唱、管弦楽を含めた総員は70余名であった⁴⁹。《セビラの理髪師》（または《セヴィラの理髪師》）は3月21日帝国劇場昼公演の1回のみで、配役は、ロジーナ：センツ〔センザ〕、ベルタ：バラリン、伯爵：ベロッチィ〔ベロッチ〕、フィガロ：スカムッツィ、バルトロ：ベレッチィ〔ベレッチ〕、バジーリオ：マウチェリ〔マウセリ〕、軍曹：バロンティニーニ〔バロンティニ〕である⁵⁰。



第3回『カーピ伊太利大歌劇 筋書』(大正15年。筆者所蔵)

同年9～10月には第3回露西亜大歌劇の来日公演が行われたが、全9演目にロッシーニ作品は含まれなかった⁵¹。ちなみに露西亜大歌劇の第1回・第2回は亡命白系ロシア人の歌劇団によって行われ、第3回から革命後のソヴィエト当局の後援を得た別団体が来日し、昭和2年（1927年）の第4回が最後となった。第3回の演目には《リゴレット》と《アイーダ》が含まれたが、第4回はイタリア・オペラがなく、フランスとロシアの作品のみが上演されている⁵²。

以上がイタリア・オペラを演目を含む、大正期の海外オペラ団来日公演の概要である（バンドマン歌劇団も数度来日したが、演目は英語オペレッタにつき除外）。ロッシーニは《セビーリヤの理髪師》のみで、現時点ですべての配役を知りえたわけではなく、完全なリストは今後の宿題とさせていただきます。なお、一連の公演では各日に配役表

が配布されたが、これとは別に全演目のあらすじと解説を掲載した『筋書』も販売されている。一連の『筋書』は次に述べる大田黒元雄の『歌劇大観』と共に、個々の作品がどのように紹介されたかを知る貴重な資料となっている。

大正期のオペラ解説書とロッシーニの逸話、ラジオ放送の開始

ロッシーニとその作品については、非常に簡略ではあっても明治 45 年出版の柴田環『世界のオペラ』に肖像画と共に紹介されている。但し《セビーリヤの理髪師》の初演日は 1817 年 1 月 20 日と誤記されている（正しい初演日 1816 年 2 月 20 日はまだ知られず、20 世紀後半のある段階まで 1816 年 2 月 5 日または 6 日と信じられた。『世界のオペラ』における 1817 年 1 月 20 日の典拠は不明）。大正期には前記『筋書』も現れたが、大田黒元雄の『歌劇大観』（音楽と文芸社、大正 6 年）が日本初の優れたオペラ解説書となり、その大正 14 年改訂増補版（第一書房）は現在のオペラ本と遜色ない内容を備えている。そこではロッシーニ [ロッシーニ] の《セヴィラの理髪師》《セミラミデ》《ウィリアム・テル》が紹介されているが、改訂増補された《セヴィラの理髪師》には、ロッシーニがパイジェットに配慮して題名を特に《アルマヴィヴァまたは無益な用心》としたのにパイジェット派があらゆる妨害を試みて初演が大失敗した、序曲に《イギリスの女王エリザベッタ》のそれを用いた、第 2 幕歌の稽古の場でプリマ・ドンナが得意な曲を歌う習慣がある、などの逸話を紹介し、このオペラは短期間に作曲されたが「猶この作の音楽がその初演 後百年以上を経過した今日、人に清新の感を興へるのは感嘆に値するではないか？」と結んでいる⁵³。

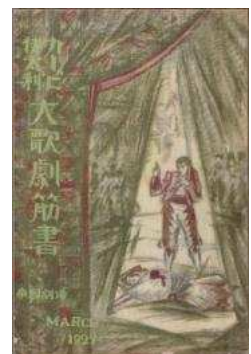
作曲家の生涯や逸話も大正期の音楽雑誌や書籍で紹介され、ロッシーニについては大正 2 年の『音楽』第 4 巻第 6～8 号（東京音楽学校校友会）に佐久間孝夫が 3 回にわたって連載している（内容未確認）。逸話は馬場二郎『音楽夜話』（培風館、大正 13 年）に、記憶力の悪いロッシーニ [ロッシーニ] がピシヨップと会った際に彼の名前を思い出せず、ピシヨップの歌謡「風が吹く時」を口笛で吹いて感謝された話を紹介している。ロッシーニの食通ぶりや、美食のために引退したなどの逸話は大田黒元雄譯『水の上の音楽 海外音楽随筆集』（第一書房、大正 14 年）所収のカール・ヴァン・ヴェクテン「音楽と料理」（159-89 頁に掲載）が最初と思われ、これが食通ロッシーニのイメージを日本で広める発端になったものと思われる。

日本におけるラジオ放送の始まりも大正期の出来事である。その最初は大正 14 年（1925 年）3 月に東京放送局が行った試験放送である（3 月 1 日試験放送開始。同月 22 日からの仮放送を経て、7 月に 12 日に本放送を開始）⁵⁴。興味深いことに、最初の試験放送が行われた 3 月 1 日は、第 2 回カーピ伊太利大歌劇の来日公演初日に当たっており、午後 2 時からの放送にはそのメンバーが指揮者カスターノのピアノ伴奏で 3 曲のオペラ・アリアを歌った（《道化師》《蝶々夫人》《椿姫》より）。ロッシーニ作品は 4 月 10 日に陸軍戸山学校軍楽隊による《ウィリアム・テル》の一部、同月 12 日に明治大学ハーモニー・ソサエティーによる《セビーリアの理髪師》序曲、5 月 10 日にハーモニー・ソサエティーによる《ウィリアム・テル》序曲が生放送されている⁵⁵。

IV. 昭和元年から昭和 20 年 8 月までのロッシーニ上演

海外歌劇団の来日継続と、世界的プリマ・ドンナの来日演奏

大正 15 年（1926 年）12 月 25 日、大正天皇が崩御し、元号が昭和となってしばし歌舞音曲が停止された。翌、昭和 2 年（1927 年）3 月、カーピ伊太利大歌劇の第 4 回来日公演が行われ、次の 18 演目が上演された（3 月 10 日～4 月 5 日。東京と大阪で合計 28 公演）——ロッシーニ《セヴィラの理髪師》。ベッリーニ《夢遊病者 [夢遊病の女]》（本格日本初演）。ドニゼッティ《ルチア》。ヴェルディ《リゴレット》《トロヴァトーレ》《椿姫》《アイダ》、《仮面舞踏会》（日本初演）。ビゼー《カルメン》。オッフエンバック《ホフマン物語》。マスネ《タイス》。ポンキエリ《ジョコンダ》。ムソルグスキー《ホヴァンシチーナ》（日本初演）。プッチーニ《マノン・レスコー》（日本初演）、《トスカ》《蝶々夫人》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》（《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て）。メンバーは、ソプラノ 7、メゾソプラノ 5、テノール 4、バリトン 4、バス 1 の合計 21 名からなり、指揮者や管弦楽を含めた総員は 80 余名または 75 名であった⁵⁶。《セヴィラの理髪師》は 3 月 18 日の帝国劇場 1 回のみで、指揮はガエターノ・コメリ（Gaetano Comelli, 1894-77）。配役は、ロジーナ：カルガッティ、ベルタ：スミルノワ、伯爵：ペロッティ、フィガロ：スカムツィ、バルトロ：ベレッティ、バジリオ：マウチエリ [マウチェーリ]、軍曹：パロンティニ [パロンティニ]⁵⁷であった。同年



第 4 回『カーピ伊太利大歌劇筋書』(昭和 2 年。筆者所蔵)

4～5月には第4回露西亜大歌劇の来日も行われたが、前記のようにイタリア・オペラは演目に含まれなかった。

昭和4年(1929年)3月には第5回カーピ伊太利大歌劇の来日公演が行われ、次の16演目を上演した(3月16日～4月3日。東京と名古屋で合計20公演)——ロッシーニ《セヴィラの理髪師》(公演プログラムでは《セビラの理髪師》。図版参照)。ベッリーニ《夢遊病者[夢遊病の女]》。ドニゼッティ《ルチア》。ヴェルディ《リゴレット》《トロヴァトーレ》《椿姫》《仮面舞踏会》《アイダ》。ビゼー《カルメン》。オッフエンバック《ホフマン物語》。マスネ《マノン》(日本初演)。ボンキエリ《ジョコンダ》。プッチーニ《ボエーム》《トスカ》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》(《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て)。

メンバーは、ソプラノ6、メゾソプラノ3、テノール5、バリトン4、バス3の合計21名からなり、指揮者カスタンイーノと副指揮者、バレエや管弦楽を含む総員は80余名であった⁵⁸。《セヴィラの理髪師》(《セビラの理髪師》)は3月24日の帝国劇場昼公演1回のみで、配役は、ロジナ：フェルリート、ベルタ：チエリ、アルマヴィヴァ伯爵：タンミネロ[正しくはトゥミネッコ]、フィガロ：リアリ[レアーリ]、バルトロ：ベレッティ[ベレッティ]、ドンバシリオ：マウチエリ[マウチェーリ]、フィオレロ：コンティニ[コンティニ]、軍曹：パロンティニ[パロンティニ]であった⁵⁹。この第5回は前回にも増して好評を得た。



第5回カーピ伊太利大歌劇《セビラの理髪師》プログラム(昭和4年、筆者所蔵)

翌月には著名なコロラトゥーラ・ソプラノのアメリータ・ガッリ=クルチ(Amelita Galli-Curci, 1882-1963。日本ではガリクルチと称される)が来日し、帝国劇場で演奏会を開いた(4月26、28、30日)。これは世界的プリマ・ドンナの日本初リサイタルと位置づけて良く⁶⁰、その第1夜にロッシーニの「タランテラ」と歌劇「セヴィルの床屋」ロジーナの歌、第3夜では歌劇「セヴィルの床屋」のロジーナの歌、プロッホ作曲による歌劇「セヴィルの床屋」中の音楽練習曲(主題と変奏)を歌った⁶¹。プロッホのそれはルイージ・アルベルギーニのフルート助奏とホーマー・サミュエルスのピアノ伴奏で歌われ、5月12日帝国劇場の「ガリクルチ女史告別大音楽會」でも歌われた。曲目には《夢遊病の女》《清教徒》の aria に加えて《ランメルモールのルチア》狂乱の場もあるなど(筆者所蔵の5月19日告別演奏会の予告チラシ)、高度な技巧を要する楽曲が盛り込まれている⁶²。



ガリクルチ女史告別大音楽會プログラム(昭和4年、筆者所蔵)

昭和5年(1930年)3月には第6回カーピ伊太利大歌劇が来日したが、「英船セント・アルバン号で18日に神戸に着いた一行50名(一部先着)のうち、47名がパスポートの期限切れで上陸禁止となり、予告済みの帝劇公演と放送だけという条件で入国許可」⁶³されるアクシデントが起きた。その結果、当初予定を大幅に減らし、3月21日～30日に次の9演目を帝国劇場で上演しただけで終わった(合計12公演。これとは別に3月31日に《椿姫》を放送)——ロッシーニ《セヴィラの理髪師》。ドニゼッティ《ルチア》。ヴェルディ《リゴレット》《椿姫》《アイダ》。グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。オッフエンバック《ホフマン物語》。プッチーニ《ボエーム》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》(《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て)。メンバーは、ソプラノ4、メゾソプラノ4、テノール5、バリトン2、バス3の合計18名からなり、指揮者や管弦楽を含めた総員は53名であった。《セヴィラの理髪師》は3月30日の帝国劇場夜公演1回のみで、配役は、ロジーナ：デ・アルバ、ベルタ：ブガメリ、伯爵：トゥミネッコ、フィガロ：レアリであった⁶⁴。カーピ伊太利歌劇団は同年解散してしまうが、その原因は日本公演の縮小による経済的打撃のみならず、前年10月に始まった世界恐慌の影響もあったようだ。

昭和6年(1931年)4月21日にはトーティ・ダル・モンテ(Toti dal Monte, 1893-1975)が夫のテノール、エンツォ・デ・ムーロ=ロマンツォ(Enzo De Muro-Lomanto, 1902-52)と共に来日し、同月26～28日と30日に帝国劇場で異なる曲目による4回の演奏会を行った(当初は29日も含めた5回が告知されていた。筆者所蔵のチラシ参照)。ルチア狂乱の場を含む多数の曲が歌われたが、ロッシーニ作品は第1夜の歌劇「セビラの床屋」より「ウナ・ヴォーチェ」のみである。一連の演奏会は高い評価を得た⁶⁵。



トーティ・ダル・モンテ来日演奏会のチラシ(昭和6年、筆者所蔵)

同年5月28日には、報知講堂で東京オペラ・コミック劇場の第1回公演に《セヴィラの理髪師》が上演された（上演時の正確な題名は不明。出演は清水静子、大庭節、和気日出松ほか）⁶⁶。6月10日には清水金太郎・静子夫妻の東京歌劇座が《セヴィラの理髪師》を上演した（正確な題名表記は不明）⁶⁷。しかし、9月以降は満州事変の余波でオペラや音楽会が徐々に不入りになった。

昭和8年（1933年）1月29日には伊太利サンカルロ大歌劇が初来日し、2月1～16日、3月1～26日に次の12演目を大阪、東京、名古屋で上演した（合計40公演。2月11日からニュージーランド他との契約で一時的に離日）——ロッシーニ《セヴィラの理髪師》。ドニゼッティ《ルチア》。ヴェルディ《リゴレット》《トロヴァトーレ》《椿姫》。グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。プッチーニ《ボエーム》《トスカ》《蝶々夫人》。マスカーニ《カヴァレリア・ルスティカーナ》。レオンカヴァッロ《道化師》（《カヴァレリア・ルスティカーナ》と二本立て）。メンバーは、ソプラノ6、メゾソプラノ3、テノール3、バリトン5、バス5の合計22名からなり、指揮者や管弦楽を含めた総員は65余名であった。

《セヴィラの理髪師》は2月8日、9日（大阪宝塚中劇場）、3月9日（飛行館）、22日（大阪宝塚中劇場）の4回。配役は、ロジーナ：ヴァルディ、ベルタ：ベレット、伯爵：ローヨ、フィガロ：カヴァッロ/ジョヴァンニ、バルトロ：シラヴォ、バジリオ：マウチェリであった⁶⁸。けれども全体に評価が低く、「主役準主役のみの場面においては芸術的な統制が舞台を引きしめるがその他の場合には素人芝居じみた混乱、異なる作品への背景の転用は「作者及び観客に対する侮辱」と酷評された⁶⁹。そしてこれ以後、1956年のNHKイタリア歌劇まで海外歌劇団の来日が途絶したのであった。



サンカルロ大歌劇プログラム(昭和8年2月13～16日。日比谷公会堂。筆者所蔵)

昭和9年から昭和16年までのロッシーニ上演

昭和9年（1934年）6月1～10日、築地小劇場で日本楽劇協会/金曜会がボーマルシェの劇『セキラ [セキール] の理髪師』を音楽付きで上演した（総監督：山田耕筈）⁷⁰。翌昭和10年（1935年）6月にはガッリニクルチが再来日し、6月10日（日比谷公会堂）と12日（軍人会館）に演奏会を行い、その初日にロシニの「タランテラ」を歌った⁷¹。

二二六事件の起きた昭和11年（1936年）には、10月21～23日に軍人会館でヴォーカル・フォアが第3回オペラ公演として《セヴィラの理髪師》を部分上演した。指揮：斎藤秀雄、演出：金杉淳郎、新交響楽団、ヴォーカル・フォア合唱団、出演は滝田菊江、永田弦次郎、内田栄一、横田孝、日比野秀吉ほか⁷²。余談であるが、後に藤原義江はこの年の秋にベルリーンのホテルで著名なロシア人のバス歌手フョードル・シャリアピン [シャリャーピン] (Fyodor Ivanovich Chaliapin, 1873-1938) と会った際に、日本を再訪して《セヴィラの理髪師》をやる計画への協力を求められたと語っている。シャリアピンがバジリオを歌い、フィガロにイタリア人バリトン歌手を伴し、指揮者もパリから連れてゆく、日本では他の役と合唱団、オーケストラを用意してくれれば、と云うので翌年帰国して相談し始めたが、話が進展しないうちにシャリアピンがパリで急逝してしまったという。藤原はそれを惜しみ、実現したら「およそ一番たのしい立派な《セヴィラの理髪師》であつたろうと思うと、かえすがえすも残念でたまらない」と記している（「《セヴィラの理髪師》の思い出」）⁷³。

昭和13年（1938年）5月30日、軍人会館にて金子多代の第1回独唱会の中で、新演出による歌劇《セヴィラの理髪師》第1幕第1・2場を服部正編曲で上演した（伴奏：ブリューネットアンサンブル）⁷⁴。11月18日には阿南忍が日比谷公会堂で第1回発表会を開き、その第2部で三浦環訳詞による《セヴィラの理髪師》（正確な題名表記は不明）全2幕3場を上演した。指揮：山本直忠、演出：三浦環⁷⁵、中央交響楽団、配役は、ロジーナ：阿南忍、伯爵：渡辺光、フィガロ：大橋勝雄、バルトロ：三浦環、バジリオ：足立一郎ほか。11月23日には日本青年館にて三浦環歌劇学校の第1回歌劇公演を行い、その第2部で《セヴィラの理髪師》全2幕3場を三浦環自身の訳詞で上演した。指揮：山本直忠、演出：三浦環、装置：中村鐵太郎、中央交響楽団、配役は、ロジーナ：菅美沙緒、伯爵：渡辺光、フィガロ：大橋勝雄、バルトロ：三浦環、バジリオ：足立一郎ほか。三浦環は禿のかつらを着け、男装してバルトロを演じて観客を笑わせたという⁷⁶。

昭和15年（1940年）には紀元2600年を祝う演奏会が複数回催され、昭和16年には11月23日に関屋敏子が自殺、同年12月8日の対米英宣戦布告により日本は本格的な戦時体制下に入った。

戦時体制下の音楽、藤原義江歌劇団の《セヴィラの理髪師》(昭和17年から終戦まで)

昭和17年（1942年）になると、敵性文化排撃の動きが顕在化し、楽壇で片仮名追放の申し合わせが行われた——「米英膺徴戦の火蓋切らるるや、国内凡ゆる部面において敵性文化排撃の機運が熾烈となつてゐるが、楽壇で

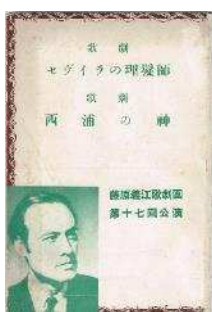
も米英の音楽禁止を申し合せたほか外国依存の精神を駆逐して日本的形式を採るため、従来米英風の名称を用ひてゐた音楽団はこの際全部之を廃止することとなり〔後略〕(『都新聞』昭和17年1月18日) 76。その結果、ヴォーカル・フォアが日本合唱團、ビクターが勝利(続いて「勝鬨」と改称した。

音楽会も軍人援護などの名目で行われたが、昭和15年に締結された日独伊三国同盟によりドイツとイタリアの音楽は排斥されず、またフランス音楽もドイツがフランスを占領したため排除されなかった。それゆえ昭和17年2月21日に日比谷公会堂で行われたグルリット指揮東京交響楽団の恤兵金献納演奏会ではベートーヴェンの交響曲第5番「運命」と共に《ウィリアム・テル》序曲が演奏され、4月19日に日比谷公会堂で行われた第3回新交響楽団の日曜演奏会ではベートーヴェンの交響曲第6番と共に《泥棒かささぎ》序曲が演奏されたのだった78。

ほどなく演奏家協会が「米英撃滅戦大東亜の第二段」に、「最も敵性の影響を受けてゐる軽音楽の肅正のため」ジャズを排撃する懇談会を開いた。そこでは「かねて肅正を要望されてゐる浅草興行街におけるヴァラエター、レビューなどの敵国、敵性音楽撃滅」のための委員会を組織し、自肅する態勢づくりも発議されている(昭和18年1月1日付『音楽文化新聞』) 79。昭和18年(1943年)1月13日には内務省と情報局が米英楽曲の一覧表(ジャズを中心に約1,000曲。レコードを含む)を作成し、その演奏禁止を通達した80。2月にはコロムビアが日蓄工業株式会社と社名を変更した(これに先立ち、日本ポリドールは大東亜と改名)。

戦時体制下でもかろうじてオペラを上演し続けたのが藤原義江歌劇團である。藤原義江歌劇團は昭和9年(1934年)6月7・8日に日比谷公会堂で藤原義江を中心に《ラ・ボエーム》を上演して誕生し、昭和10年に《リゴレット》と《トスカ》を原語上演していた。戦時下の昭和17年には歌舞伎座で《トスカ》《ローエングリン》を上演、昭和18年は4月に東京劇場で《ラ・ボエーム》を臨時上演したのに続いて、5月26～29日に歌舞伎座で弘田龍太郎《西浦の神》と《セヴィラの理髪師》を併演した(全5回)。訳詞：日比野秀吉、指揮：マンフレット・グルリット、演出：堀内敬三、管弦楽：東京交響楽団、合唱：日本合唱團、配役は次のとおり。

藤原義江歌劇團《セヴィラの理髪師》 ⁸¹ 註：弘田龍太郎《西浦の神》初演と併演	昭和18年(1943年)5月28～30日(全5回) 会場：歌舞伎座 註：29、30日は昼夜。
訳詞：日比野秀吉 指揮：マンフレット・グルリット 演出：堀内敬三 装置：三林亮太郎 管弦楽：東京交響楽団 合唱：日本合唱團 ★出典：公演プログラム	ロジーナ：大谷冽子／高柳二葉(29日昼・30日夜) アルマヴィヴァ伯爵：藤原義江 フィガロ：内田榮一／留田武(29日夜・30日昼) バルトロ：日比野秀吉 バジリオ：村尾護郎 ベルタ：鈴木三重子 フィオレーロ：波岡惣一郎



藤原義江歌劇團《セヴィラの理髪師》昭和18年プログラムと出演者全員の写真(筆者所蔵)

これは藤原義江歌劇團にとって初のオペラ・ブッフア上演で、日比野秀吉の訳詞を使用してレチタティーヴォを台詞に置き換え、楽曲にも大幅なカットが施された。《西浦の神》が酷評され経済的に大打撃を蒙ったが、《セヴィラの理髪師》については「相当の出来であった。この種の喜歌劇的にも一同仕草が上達したことは悦ばしい」（野村光一・筆『毎日新聞』5月30日）、「劇そのものゝ興味と演技の進歩によって多少は観られたが演奏は一般に甚だ不十分であった」（園部三郎・筆『朝日新聞』6月1日）と評されている⁸²。また同年9月『音楽公論』第3巻第9号には久保田公平による次の評も掲載された——「《セヴィラの理髪師》は、三林亮太郎の装置が時局がらグランドオペラの重厚さをもたなかった、また何よりも喜劇的演技が歌舞伎座の舞台のものではなく、軽演劇的要素が目立った。この点は青山杉作の演出が、歌手たちを役者として扱ったことにもよっている。これを機会に演技的訓練の再出発を行なうべきだ。次の機会には省略なしで再演してもらいたい。演奏は、東京交響楽団と指揮のグルリットは特に言うべきことなし。留田武は最上のフィガロ、大谷冽子（ロジーナ）も音色と歌の細かい注意がよい。高柳二葉（ロジーナ）も悪くないが、口先の甘さが気になる」（概略）⁸³。後に木村重雄は、「バルトロがうまくなくてね。あの早口のアリアでひっかかったり……」と述懐している⁸⁴。同年7月には当時実施されていた「敵性楽曲の出版禁止」に加え、すでに出版されている楽譜のうち明らかに米英の楽曲に関しては内容を問わず廃棄することが、全国楽器業組合聯合会を通じて全国の楽譜出版業者に通達された⁸⁵。

昭和19年（1944年）には戦況が悪化し、2月26日に藤原義江歌劇團が大阪北野劇場で上演した《フィデリオ》が戦時下最後のオペラ上演となった。そして昭和20年（1945年）3月10日未明の東京大空襲、8月6日の広島、9日の長崎への原子爆弾投下を経て、8月14日にポツダム宣言が受諾され、翌15日の玉音放送により終戦を迎えたのだった。

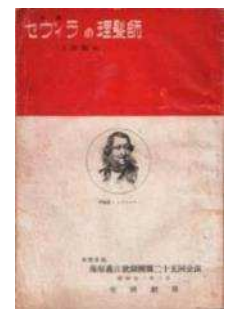
V. 戦後23年間のロッシーニ受容(昭和20年9月から昭和43年まで)

終戦から昭和29年までのロッシーニ上演

8月15日の終戦からほどなく、日本はアメリカの占領下に入った。9月には戦後初のオーケストラの演奏会が開かれ、声楽を含む各種コンサートも復活したが、オペラの上演は昭和21年（1946年）1月27～31日に藤原義江歌劇團が帝国劇場で行った《椿姫》が最初で、ヴィオレッタを大谷冽子、アルフレードを藤原義江が歌った（昼夜合めて全7回）。同歌劇団は翌昭和22年4～5月に《カルメン》、9月に《パリアツチ》《カヴァレリアスチカナ》を上演、続いて長門美保歌劇研究所や原信子の東京歌劇協会がオペラの上演を行った。

最も活発に活動した藤原義江歌劇團は、昭和22年2月の《ラ・ボエーム》、7～8月の《タンホイザー》、12月の《カルメン》を経て、昭和23年（1948年）3月に帝国劇場で《セヴィラの理髪師》を日比野秀吉の訳詞で上演した（戦後初のロッシーニ上演。3月5～20日、23日、24～30日昼夜、合計31回）。指揮：マンフレット・グルリット、演出：青山圭男、装置：三林亮太郎、管絃楽：東寶シンフォニー、合唱：藤原歌劇團合唱部。配役は次のとおり⁸⁶。

藤原義江歌劇團《セヴィラの理髪師》	昭和23年(1948年)3月5～20日、23日、24～30日 昼夜(全31回) 会場:帝国劇場
訳詞:日比野秀吉 指揮:マンフレット・グルリット 演出:青山圭男 装置:三林亮太郎 照明:橋本義雄 衣装:吉村倭一 管弦楽:東寶シンフォニー ⁸⁷ 合唱:藤原歌劇團合唱部	ロジーナ:大谷冽子/砂原美智子 アルマヴィヴァ伯爵:藤原義江 フィガロ:宮本良平/藤井典明 ドクトル バルトロ:日比野秀吉 ドン、バシリオ:下八川圭祐/村尾護郎 ベルタ:小森智慧子/城須美子 フィオレロ:倉田芳雄 巡邏隊の隊長:宮崎健太郎 ★出典:上演脚本、1-2頁



セヴィラの理髪師上演脚本(昭和23年。筆者所蔵)

その『上演脚本』には昭和18年に同歌劇団が行った大幅なカットを復活させると書かれているが⁸⁸、後に宮沢縦一は、バレエ《イーゴリ公》との併演のためカットして上演したと語っている⁸⁹。なお、使用された訳詞台本を見ると、第2幕歌の稽古の場にロジーナが「(適當の歌一曲歌ふ。)」とあり⁹⁰、曲は不明ながらアリアが挿入されたようだ（昭和18年も同様。歌った曲を特定しえない）。

ほどなく藤原義江歌劇團は同じプロダクションで《セヴィラの理髪師》の大阪公演と名古屋公演を行い、大阪

朝日会館では5月15～17日に全5回（主催：朝日新聞大阪厚生事業団。スタッフ・配役は帝国劇場と同じ）、名古屋宝塚劇場では6月16、17日に全2回上演した（出演：砂原美智子、藤原義江、宮本良平、日比野秀吉、下八川圭祐、城須美子、倉田芳雄）⁹¹。昭和25年（1950年）にはNHKラジオ「放送音楽会」が《ウィリアム・テル》を植村敏夫訳で60分放送した（指揮：マンフレット・グルリット、NHK交響楽団、東放唱、出演は、中山悌一、岩崎成章、三宅春恵、伊藤亘行、川崎静子、石津憲一、秋元清一、畑中良輔、荒井基裕、石田葉、柴田陸陸）⁹²。翌、昭和26年（1951年）3月、藤原義江歌劇團は3回の米国留学ドル募金の米軍公演を日比谷公会堂で行い、その2回目（3月14日）に《セヴィラの理髪師》を上演した（指揮：上田仁、ロジーナ：大谷渢子。他の2演目は《蝶々夫人》と《椿姫》）⁹³。

昭和28年（1953年）には藤原義江歌劇團が2月2～8日に新宿劇場で《椿姫》と《セヴィラの理髪師》を昼夜交互に上演、《セヴィラの理髪師》は全7回、訳詞：日比野秀吉、指揮：森正、演出：青山圭男、管弦楽：東京交響楽団、合唱：藤原歌劇団合唱部、配役は次のとおり⁹⁴。

藤原義江歌劇團《セヴィラの理髪師》	昭和28年(1953年)2月2～8日(全7回) 会場:新宿劇場 註:2日から昼夜交互に《椿姫》と上演
訳詞: 日比野秀吉 指揮: 森正 演出: 青山圭男 装置: 三林亮太郎 照明: 橋本義雄 管弦楽: 東京交響楽団 合唱: 藤原歌劇団合唱部	ロジーナ: 高柳二葉 / 戸田政子 伯爵: 藤原義江 / 木下保 フィガロ: 藤井典明 バルトロ: 高木清 バジリオ: 宮本良平 ベルタ: 越賀恵美子 フィオレロ: 菊池初美 ★出典:『日本のオペラ史』341頁

藤原義江歌劇團は続いて創立20周年記念特別公演と銘打ち、同年3月18～20日に新橋演舞場で各日2回の合計6回、《セヴィラの理髪師》を上演した。訳詞：日比野秀吉、指揮：森正、演出：青山圭男、管弦楽：東京交響楽団、合唱：藤原歌劇団合唱部、配役は次のとおり⁹⁵。

藤原義江歌劇團《セヴィラの理髪師》	昭和28年(1953年)3月18～20日昼夜(全6回) 会場:新橋演舞場
訳詞: 日比野秀吉 指揮: 森正 演出: 青山圭男 装置: 三林亮太郎 照明: 橋本義雄 衣装: 吉村倭一 管弦楽: 東京交響楽団 合唱: 藤原歌劇合唱団	ロジーナ: 高柳二葉 / 戸田政子 アルマヴィヴァ伯爵: 藤原義江 / 木下保 フィガロ: 宮本良平 / 藤井典明 バルトロ: 高木清 バジリオ: 宮本良平 / 村尾護郎 ベルタ: 越賀恵美子 フィオレロ: 菊池初美 隊長: 太田孝雄 ★出典: 公演プログラム

	18 水	19 木	20 金
	晝夜	晝夜	晝夜
ロ ジ ー ナ	高 戸	戸 高	戸 高
フ イ ガ ロ	柳 田	田 柳	田 柳
バ ジ リ オ	宮 藤	宮 藤	藤 宮
ア ル マ ヴィ ヴ ア	本 井	本 井	井 本
イ ル マ	木 木	藤 藤	木 木
マ	下 下	原 原	下 下

チラシ裏面の各日
配役

ダブルキャスト昼夜の区別はチラシの告知に示され、この公演のチラシとプログラムには「藤原義江歌劇團」ではなく「藤原歌劇團」のみが使われており、以下の記述では今日的表記の「藤原歌劇団」を使用する。



藤原義江と戸田政子



藤原歌劇団創立20周年特別公演チラシと《セヴィラの理髪師》プログラム(昭和28年。筆者所蔵)



昭和 30 年から昭和 42 年までのロッシーニ上演

次に、昭和 30 年から 42 年まで 13 年間の歩みを明らかにしておこう。

昭和 30 年（1955 年）には藤原歌劇団が受託公演として 2 月 16 日に日本青年館、4 月 19・20 日に共立講堂で《セヴィラの理髪師》を上演した。どちらも指揮は福永陽一郎、出演は、ロジーナ：戸田政子、伯爵：藤原義江、フィガロ：宮本良平、バルトロ：高木清、バジリオ：村尾護郎、ベルタ：越賀恵美子ほかであった⁹⁶。

昭和 31 年（1956 年）11 月 7、8、9 日には、藤原歌劇団が姫路労音の主催で姫路公会堂にて《セヴィラの理髪師》を上演した（指揮：高田信一、演出：青山圭男、管弦楽：ニューサロンオーケストラ、合唱：藤原歌劇団合唱部、出演：高柳二葉、宮本良平、木下保、仲野ともや、村尾護郎ほか）⁹⁷。これに先立つ同年秋には NHK 招聘のイタリア歌劇団（Lirica Italiana）の第 1 回公演が行われ、《アイダ》《フィガロの結婚》《トスカ》《ファルスタッフ》の上演とラジオ・テレビ放送がなされた。これは「数多くの人々に強烈な印象を与え、さらに関係アーティストやスタッフに大きな収穫をもたらし」「日本オペラ史上最大の出来事となった」⁹⁸。とはいえより大きな衝撃は昭和 34 年の第 2 回、デル・モナコとゴッピ主演のヴェルディ《オテロ》で、ロッシーニ作品は昭和 38 年の第 4 回公演を待たねばならない（後述）。

昭和 32 年（1957 年）には藤原歌劇団が 8 月 16 日に日比谷野外音楽堂で 1 回だけ《セヴィラの理髪師》を「藤原歌劇団納涼公演」として行った。訳詞：日比野秀吉、指揮：福永陽一郎、演出：藤原義江、管弦楽：新東京管弦楽団、合唱：藤原歌劇団合唱部、配役は、ロジーナ：古賀恵美子、伯爵：竹居昭、フィガロ：宮本良平、バルトロ：斎藤達雄、バジリオ：世良明芳、ベルタ：山本春子、フィオレロ：川口裕司ほかであった⁹⁹。同年、プリモ楽譜出版社が《セヴィリアの理髪師》のピアノ伴奏譜を「歌劇総譜全集 第 3 巻」として刊行した。その序では、「原語に作曲された音楽はその一語一語の有する意味・抑揚・アクセント・リズムを芸術として総合的に最高に価値づける様に作られて居る事から」、日本語では「音楽的にも原作をゆがめる結果となる」といった理由を挙げて日本語訳詞を載せず、楽譜中に原語のみを記し、巻末に「可能な限り直訳した正確な日本語全訳」を収めている（同巻では佐々木実の全訳を掲載）¹⁰⁰。原本は示されないが、楽譜部分は 1900 年のシェーマー版（G.Schirmer, New York）と完全に一致する。



プリモ楽譜出版社の楽譜（昭和 32 年。筆者所蔵）

昭和 33 年（1958 年）は、藤原歌劇団が 8 月 13・14 日に産経ホールで「青少年音楽教室」と称して《セヴィラの理髪師》を上演した。指揮：高田信一、演出：青山圭男、管弦楽：新東京管弦楽団、配役は、ロジーナ：古賀恵美子、伯爵：藤原義江、フィガロ：宮本良平、バルトロ：斎藤達雄、バジリオ：世良明芳、ベルタ：山本春子、フィオレロ：川口裕司であった¹⁰¹。



第 8 回東京芸術祭オペラ公演《セヴィラの理髪師》プログラム（1958 年。筆者所蔵）

けれどもより大規模なのは、同年 10 月 30 日～11 月 7 日に行われた東京都教育委員会／（財）都民劇場 主催「第 8 回東京芸術祭オペラ公演／都民劇場演劇サークル第 114 回定期公演」の《セヴィラの理髪師》である（10 月 30・31 日、11 月 1～3 日は日比谷公会堂、11 月 5～7 日は共立講堂。全 10 回）。訳詞：鈴木松子、指揮：森正、演出：栗山昌良、管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団、合唱：二期会合唱団、配役は次のとおりで、レチタティーヴォ・セッコは 20 歳の高橋悠治がピアノで伴奏した¹⁰²。

二期会《セヴィラの理髪師》	昭和 33 年（1958 年）10 月 30・31 日、11 月 1～3 日（2・3 日は昼夜。全 7 回）会場：日比谷公会堂及び 11 月 5～7 日（全 3 回）会場：共立講堂
訳詞：鈴木松子 指揮：森正 演出：栗山昌良 装置：妹尾河童 照明：石井尚郎 衣装：緒方規矩子 管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団 合唱：二期会合唱団 ピアノ：高橋悠治	アルマヴィーヴァ伯爵：柴田陸陸／渡辺高之助 バルトロ：栗本正／畑中良輔 ロジーナ：柴田喜代子／鉄弥恵子 バジリオ：秋元雅一朗／大橋国一 フィガロ：石津憲一／立川澄人〔立川清登〕 ベルタ：西脇達子〔長嶋達子〕／佐藤喜美子 フィオレロ：川名佑一／芳野靖夫 アンブロジーノ：柴田昭司 隊長：島田恒輔 ★出典：公演プログラム ¹⁰³

配役日割表	役日	伯爵	バルトロ	ロジーナ	バジリオ	フィガロ	ベルタ	フィオレロ
	30夜	柴田	畑中	柴田	秋元	立川	長嶋	川名
31夜	渡辺	畑中	鉄	大橋	石津	佐藤	川名	
1夜	柴田	栗本	柴田	秋元	立川	長嶋	川名	
2昼	渡辺	畑中	鉄	大橋	石津	佐藤	川名	
2夜	柴田	栗本	柴田	秋元	立川	長嶋	芳野	
3昼	渡辺	畑中	鉄	大橋	石津	佐藤	芳野	
3夜	柴田	栗本	柴田	秋元	立川	長嶋	川名	
5夜	渡辺	畑中	鉄	大橋	石津	長嶋	芳野	
6夜	柴田	栗本	柴田	秋元	立川	佐藤	芳野	
7夜	渡辺	栗本	鉄	大橋	石津	佐藤	芳野	

プログラム掲載の配役日割表

昭和34年(1959年)7～9月には東京労音の主催で藤原歌劇団と二期会による《セヴィラの理髪師》が全36回上演された。会場は、7月5、7日が日比谷公会堂、7月9、10、16、18、20、27日、8月7～11、16～21日、9月12～14、17～20日が文京公会堂、7月14、15日、9月26、28日が共立講堂、8月12～15日、9月8、9日が産経ホール。藤原歌劇団は、指揮：マンフレット・グルリット、演出：青山圭男、管弦楽：ABC交響楽団、合唱：藤原歌劇団合唱団、配役は、ロジーナ：大谷渢子／古賀恵美子／日高久子、伯爵：宮本正／竹居昭、フィガロ：宮本良平／宮本昭太、バルトロ：斎藤達雄／津田孝雄、バジリオ：世良明芳、ベルタ：安斎恭子／越賀理恵、フィオレロ：川口裕司。二期会は、指揮：山田夏精、演出：栗山昌良、管弦楽：ABC交響楽団、合唱：二期会合唱団、ロジーナ：柴田喜代子／鉄弥恵子／滝沢三重子、伯爵：柴田陸陸／渡辺高之助／中村健、フィガロ：立川清登／中村義春、バルトロ：栗本正／畑中良輔／吉岡巖、バジリオ：秋元雅一朗、ベルタ：西脇達子／佐藤喜美子、フィオレロ：川名佑一である¹⁰⁴。

昭和35年(1960年)は11月16日、横浜交響楽団が第140回定期公演として《セヴィリアの理髪師》を自主上演した(神奈川県立音楽堂)。指揮：小船幸次郎、配役は、ロジーナ：古賀恵美子、伯爵：川口祐司、フィガロ：宮本昭太、バルトロ：津田孝雄、バジリオ：世良明芳。これは同交響楽団が簡易装置を手作りした上演であった¹⁰⁵。

昭和36年(1961年)には、藤原歌劇団が2月22日に読売ホールで1回だけ《セヴィラの理髪師》を上演した。訳詞：日比野秀吉、指揮：福永陽一郎、演出：藤原義江、管弦楽：インペリアル・フィルハーモニー交響楽団、合唱：藤原歌劇団合唱部、配役は、ロジーナ：唐木暁美、伯爵：川口裕司、フィガロ：平田栄寿、バルトロ：斎藤達雄、バジリオ：高田彬生、ベルタ：関貞子、フィオレロ：中島国治であった¹⁰⁶。藤原歌劇団は続いて5月8、9、14、16日に神奈川県立音楽堂で横浜労音主催の《セヴィラの理髪師》公演も行っている(合計5回)。指揮：福永陽一郎、演出：藤原義江、管弦楽：コンセル・ポピュレール、配役は、ロジーナ：大谷渢子／古賀恵美子／唐木暁美、伯爵：竹居昭／宮本正、フィガロ：平田栄寿／宮本昭太、バルトロ：津田孝雄／斎藤達雄、バジリオ：高田彬生／世良明芳、ベルタ：越賀恵美子／安斎恭子、フィオレロ：家永勝、士官：森田恭雄であった¹⁰⁷。同年12月3日には二期会が東京文化会館大ホールで昼夜2回、《セヴィラの理髪師》を上演した。訳詞：鈴木松子、指揮：大町陽一郎、演出：栗山昌良、管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団、合唱：二期会合唱団、配役は次のとおり¹⁰⁸。

二期会《セヴィラの理髪師》	昭和36年(1961年)12月3日(昼夜。全2回) 会場：東京文化会館
訳詞：鈴木松子	アルマヴィヴァ伯爵：森敏孝
指揮：大町陽一郎	ロジーナ：滝沢三重子
演出：栗山昌良	バジリオ：秋元雅一朗
装置：妹尾河童	フィガロ：立川清登
照明：石井尚郎	バルトロ：畑中良輔
衣装：緒方規矩子	ベルタ：長嶋達子
管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団	フィオレロ：川名佑一
合唱：二期会合唱団	アンブロジーノ：築地文夫
ピアノ：是安亨	隊長：近藤安个 ★出典：東京文化会館アーカイブ

昭和38年(1963年)にはNHKイタリア歌劇団の第4回公演が行われ、10月23日～11月20日に東京と大阪で合計7回《セヴィリアの理髪師》を上演した。指揮：ニーノ・ヴェルキ、演出：ブルーノ・ノフリ、管弦楽：NHK交響楽団、合唱：二期会合唱団／藤原歌劇団合唱部、配役は次のとおり¹⁰⁹。

NHK イタリア歌劇団《セヴィラの理髪師》 主催：日本放送協会／NHK サービスセンター	昭和38年(1963年)10月23・28日、11月1・6・9日 会場： 東京文化会館大ホール(5回) 11月17・20日 会場：大阪・フェスティバルホール
指揮：ニーノ・ヴェルキ 演出：ブルーノ・ノフリ 美術：カミルロ・パラヴィチーニ 管弦楽：NHK 交響楽団 合唱：二期会合唱団／藤原歌劇団合唱部 注：装置、照明、チェンバロ奏者などの記載なし。 ★出典：公演プログラム	フィガロ：アルド・ブロッティ ロジーナ：ジュリエッタ・シミオナート アルマヴィーヴァ伯爵：ロレンツォ・サバトウッチ ドン・バジリオ：ニコラ・ロッシ レマーニ ドン・バルトロ：アルトゥーロ・ラ ポルタ ベルタ：アンナ・ディ スタジオ フィオレルロ：ジョルジョ・オネステイ 軍曹：マリオ・グッジャ アンブロージ：久米明／有馬五郎 公証人：桑山正一／小林恭

その初日(10月23日)はNHKによって全曲収録され、ラジオは同日夜9時からNHK第二で、テレビは翌24日午後7時30分からNHK総合で放送されている(公演プログラムの放送予告より)。海外の団体やグループによるロッシーニ上演は昭和8年の伊太利サンカルロ大歌劇から30年ぶりであったが、他の演目も含め「全体に水準の低い公演だった」という¹¹⁰。ちなみにこの上演では、レチタティーヴォ・セッコの伴奏にチェンバロが使われた。そもそもレチタティーヴォ・セッコが日本の上演で歌われたのは昭和28年10月のグルリット・オペラ協会《ドン・ジョヴァンニ》が最初で、昭和31年3月に二期会が行った《フィガロの結婚》が日本で2回目の試みであった。けれども当時日本にチェンバロという楽器がほとんどなかったので「グランド・ピアノの弦の上に紙をのせて音色を変え、チェンバロの代わり」にし、グルリットも「その代用ピアノを自分で弾きながら指揮をした」という¹¹¹。そして初めてチェンバロを用いてレチタティーヴォ・セッコを伴奏したのが、二期会の試みから半年後の第1回NHKイタリア歌劇団の《フィガロの結婚》で、これを機に少しずつチェンバロが伴奏に使われ始めるようになった。

昭和40年(1965年)は、3月28日に青少年音楽協会創立25周年記念公演として藤原歌劇団が東京文化会館で昼夜2回《セヴィラの理髪師》を上演した。指揮：飯守泰次郎、演出：栗山昌良、管弦楽：ABC交響楽団、合唱：藤原歌劇団合唱部、配役は次のとおり¹¹²。

二期会《セヴィラの理髪師》	昭和40年(1965年)3月28日(昼夜。全2回) 会場：東京文化会館
指揮：飯守泰次郎 演出：栗山昌良 装置：妹尾河童 照明：立木定彦 管弦楽：ABC交響楽団 合唱：藤原歌劇団合唱部	アルマヴィーヴァ伯爵：宮本正 フィガロ：宮本昭太 バルトロ：外山浩爾 バジリオ：世良明芳 ロジーナ：戸田政子 ベルタ：越賀理恵 フィオレロ：森田恭雄 ★出典：東京文化会館アーカイブ

同歌劇団は続いて10月26、27日、日本都市センターホールにて《セヴィラの理髪師》を上演した(全2回)。これは「藤原オペラ室内オペラシリーズ第1回」と銘打たれ、音楽監督を岩城宏之が務め、訳詞：鈴木松子、指揮：秋山和慶、演出：栗山昌良、管弦楽：東京交響楽団、合唱：藤原歌劇団合唱部、配役は3月28日と同じである¹¹³。しかし、これ以後藤原歌劇団は昭和46年(1971年)5月まで6年間ロッシーニ作品を上演せず、ヴェルディに力を入れることになる(藤原歌劇団は第1回NHKイタリア歌劇団を機に10年以上ヴェルディを本公演から外したが、1968年の創立35周年記念に《リゴレット》と《椿姫》を原語上演してレパートリーに復帰、これを境にヴェルディの原語上演を定着させた)。

その一方、日本のオペラ界では1968年のロッシーニ没後100周年に向けた動きが始まっていた。昭和42年(1967年)9月28、29日、渋谷公会堂で東京藝術大学第13回藝大オペラ公演が行った《アルジェリアのイタリア人》[アルジェのイタリア女]日本初演(原語上演。全2回)もその一つで、指揮：ニコラ・ルッチ、演出：長沼廣光、管弦楽：東京芸術大学管弦楽研究部、合唱：声楽科学生¹¹⁴、配役は、イザベルラ：矢野恵子／木村宏子、リ

ンドロ：森敏孝／中村健、ムスタファ：鈴木義弘／松尾篤興、エルヴィラ：島田祐子／安田祥子ほかである¹¹⁵。そしてこれが《セビーリヤの理髪師》以外のロッシェニ・オペラの初上演となった。

昭和 43 年(1968 年)——ロッシェニ没後 100 周年を迎えて

かくしてロッシェニ没後 100 周年の昭和 43 年(1968 年)が訪れる。この記念年については各種コンサートも含めて詳細を明らかにする必要があるが、本稿では重要公演として次の三つを挙げるにとどめたい。その最初は 3 月 15 日、東京文化会館大ホールの読売日本交響楽団第 45 回定期演奏会におけるロッシェニ《ミサ・ソレムニス》管弦楽版の日本初演である(二期会と提携)。これは、指揮：ニコラ・ルッチ、管弦楽：読売日本交響楽団、合唱：二期会合唱団研究生、ソリストは、小岩井幸(ソプラノ)、戸田敏子(アルト)、丹羽勝海(テノール)、高橋修(バス)であった。

二つ目は、6 月 18～21 日に青少年芸術祭 '68 主催公演／東京オペラ劇場第一回公演(ロッシェニ没後 100 年記念)と銘打たれた全 4 回の《セヴィリヤの理髪師》である(もしくは《セビアの理髪師》)。プログラム表紙が《セヴィリヤの理髪師》であることから事前宣伝はこれで行い、プログラム内の表記のみ《セビアの理髪師》に変更したと思われる)。これは主催／財団法人 青少年文化センターによる公演で、日本都市センターホールを会場に、指揮者 2 名、ロジーナ歌手 4 名、フィガロ、伯爵、バルトロ、バジリオはトリプルキャストとなっている。詳細は次のとおり¹¹⁶。

青少年芸術祭 '68 主催公演《セヴィリヤの理髪師》プログラム(1968 年。日本ロッシェニ協会所蔵)



青少年芸術祭 '68 主催公演 《セヴィリヤの理髪師》ロッシェニ 没後 100 年記念公演	昭和 43 年(1968 年)6 月 18～21 日(全 4 回) 会場：都市センターホール
指揮：秋山和慶(19、21 日)／村川 千秋(18、20 日) 演出：青山圭男 美術：三林亮太郎 照明：吉本一郎 管弦楽：東京交響楽団 合唱：藤原歌劇団合唱部 ★出典：公演プログラム	ロジーナ：井崎洋子(18 日)／緒方瑠璃恵(19 日)／戸田政子(20 日)／酒井美津子(21 日) フィガロ：宮本昭太(18 日)／坂本博士(19、21 日)／平田栄寿(20 日) アルマビーバ伯爵：鈴木寛一(18、20 日)／沢田文彦(19 日)／高田作造(21 日) バルトロ：植木桂(18、20 日)／三輪十次(19 日)／津田孝雄(21 日) バジリオ：梅原秀次郎(18、20 日)／世良明芳(19 日)／鈴木義弘(21 日) ベルタ：宗広紗枝(18、20 日)／古谷友子(19 日)／越賀理恵(21 日) フィオレロ：斉藤忠生(18、20 日)／森田恭雄(19、21 日)

第三が、7 月 6 日と 8 日に二期会が東京文化会館大ホールで行った《シンデレラ [ラ・チェネレントラ]》の訳詞による日本初演である。訳詞：畑中良輔、指揮：ニコラ・ルッチ、演出：栗山昌良、配役は次のとおり¹¹⁷。

これは訳詞上演であるが、公演プログラム 2 頁に掲載された二期会の短い挨拶文に、「この初演にあたっては、この作品に深い造詣を示す指揮者ニコラ・ルッチ氏を中心に、関係者一同の研究、検討のもとに準備をすすめて参りましたが、この間、訳詞について、またはカットの設定についてなど議論沸騰の幾つかの問題に多くの時間

二期会《シンデレラ》日本初演	昭和 43 年(1968 年)7 月 6・8 日 会場：東京文化会館大ホール(2 回)
訳詞：畑中良輔 指揮：ニコラ・ルッチ 演出：栗山昌良 装置：阿部信行 照明：石井尚郎 衣装：緒方規矩子 管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団 合唱：二期会合唱団 チェンバロ：芳山尚子 ★出典：同公演プログラム	シンデレラ[アンジェリーナ]：荒道子 ドン・ラミーロ：丹羽勝海 ダンディーニ：立川清登 ドン・マニーフィコ：小田清 クロリンダ：中沢桂 ティーズベ：矢野恵子 アリドーロ：平野忠彦



二期会《シンデレラ》
プログラム(1968 年。日
本ロッシェニ協会所蔵)

を費やしも致しましたなおこのたびの上演に於いては、ルッチ氏の解釈に基づき、幾箇所かでコンヴェンショナル・カットが採用されておりますことを、ご了承願います」と書かれている。これがレチタティーヴォの縮約を指すのか楽曲内での部分カットを意味するかは不明であるが、こうした問題に「議論沸騰」というところに良心的な姿勢が感じ取れる。なお、振付：友井唯起子、舞踏：法村・友井バレエ団との記載もあり、劇中でバレエの踊られたことが判る。

かくしてロッシェニ没後 100 周年の 1968 年に、ロッシェニ三大オペラ・ブッフアの本邦初演が完結した。最初の上演が没後 49 年の大正 6 年 (1917 年) 11 月 13 日であることから、ほぼ半世紀かけての達成であるが、その後 49 年間の演目が《セビーリャの理髪師》のみである事実は日本におけるロッシェニ受容の遅れを物語る。けれどもヨーロッパのロッシェニ再評価の動きが没後 100 周年の前後に本格化することを考えれば、決して遅いとは言えないだろう。そしてこの記念年から今日まで半世紀近い歩みの中に、日本における第二のロッシェニ受容の歴史が存在するのである。

終わりに

本稿はこの 1968 年をもって筆を擱く。なぜならその後の歴史は次の記念年 (すなわち没後 150 周年の 2018 年) を節目とする「受容の第二期」として構築されねばならないからである。その作業は筆者個人の仕事ではなく日本ロッシェニ協会の事業として、記念年を完成目標に組織的に行われるであろう。

その過程で、1968 年までの受容史もまた、各種新聞雑誌のデータベースやデジタル資料に基づいて再構築されねばならない。なぜなら筆者は、明治・大正期の一次資料への本格的なアプローチに先立ち、最初の 100 年を俯瞰しつつ初歩的な問題……基本資料の有無や調査方法、資料間の異同、過去の文献に対するさまざまな疑義……の個人的検討を目的に、最初の一步として本稿を書いたからである。その過程で従来文献における重要な欠落、明らかな誤謬や矛盾を多々見つけたが、個々に注記せず、より信頼性の高い資料からの情報に置き換えることにした。

さまざまなデータベースにおける旧漢字の部分的な新漢字への変更も、人名と関わるので深刻な問題を投げかける。団体や公演母体の名称も文献間で一致せず、「露西亜大歌劇」が「ロシア大歌劇」と報じられ、後世の文献では「ロシア歌劇団」とされる。藤原歌劇団も昭和 20 年代のある時点まで「藤原義江歌劇團」であり、「藤原歌劇團」を経て「藤原歌劇団」に変化した。一個の役名も上演ごとに表記が異なり、配役に掲げる役の順序も個々の上演で異なることからプログラムに沿った記載をすべきだが、そのためにはすべての公演プログラムを探し出さねばならないという困難がある。プログラムを検分できない場合は、とりあえず個々の典拠や情報源を示してしのぐしかなく、本稿はなおそうした段階であるがゆえに「最初の一步」なのである。その意味でも、本稿が個々の情報をオリジナル資料に遡って増補修正する作業の出発点とご理解いただきたい。

- 1 増井敬二『日本オペラ史 ～1952』(昭和音楽大学オペラ研究所編。水曜社、2003 年) 12 頁。より詳しく記すと、エジーディオ・ロムアルド・ドゥーニ (Egidio Romualdo Duni, 1708-75) が 1763 年 7 月 23 日にパリのイタリア劇場 (オテル・ド・ブルゴーニュ) で初演した《2 人の猟師と牛乳売り娘 (Les Deux Chasseurs et la Laitière)》となる。
- 2 曲目は英字新聞『The Japan Gazette』の広告に基づく。『日本オペラ史 ～1952』15 頁
- 3 英字新聞『The Japan Gazette』明治 8 年 10 月 28 日付の告知が、増井敬二『日本のオペラ 明治から大正へ』(民音音楽資料館、1984 年) 20 頁に複製されている。
- 4 ロネイ・セファス喜歌劇団の公演詳細は、増井敬二『日本のオペラ』23-25 頁を参照されたい。
- 5 ヴァーノン歌劇団の公演詳細は、同前 25-28 頁を参照されたい。
- 6 増井敬二『日本のオペラ』34 頁
- 7 秋山龍英編著『日本の洋楽百年史』(第一法規、1966 年) 182-83 頁
- 8 塩津洋子「明治期神戸のピアノ演奏記録」(大阪音楽大学音楽博物館『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』第 26 巻、2011 年 12 月。41-65 頁。オンライン版 ISSN 2186-7690)、同「明治期神戸のピアノ演奏記録」(大阪音楽大学音楽博物館『音楽研究 大阪音楽大学音楽博物館年報』第 27 巻、2011 年 12 月。1-16 頁)
- 9 塩津洋子「明治期神戸のピアノ演奏記録」2 頁
- 10 上海から来たピアニスト、ギョーム・ソーヴレー (G.Sauvlet) も明治 18 年 9 月 30 日と 10 月 2 日の演奏会で自作 4 曲を披露しているが、ここでは例外としておく。
- 11 塩津洋子「明治期神戸のピアノ演奏記録」11 頁
- 12 三井徹・直江学美「西洋音楽教育導入期に「民」が果たした役割」『金沢大学教育学部紀要 (人文・社会科学編) 第 53 号、平成 16 年) 3 頁
- 13 秋山龍英『日本の洋楽百年史』194 頁より
- 14 柴田環は東京音楽学校の《オルフォイス》に出演、明治 37 年に卒業して同校教員を務め、明治 44 年創設の帝国劇場歌劇部プリマ・ドンナ兼教師となった。
- 15 秋山龍英『日本の洋楽百年史』213 頁より。文中の [] は引用に際して追加

- 16 彼女の母は日本初の女子医科大学生となって医学博士の学位を得た岡見京（安政6年〔1859年〕-昭和16年〔1941年〕）。その娘メレーは、岡見京が恩人メリー・モリスの名前をもらって名付けたという。「日本キリスト教女性史（人物編）」
<http://www5e.biglobe.ne.jp/~BCM27946/okamikei.html> 参照。
- 17 秋山龍英『日本の洋楽百年史』251頁より
- 18 本格的なコントラルト来日は明治28年（1895年）のスペイン人エストレラ・ベリンファンテ（Estrella Belinfante?）が最初と思われ、「女には珍しき「コントラ、アルト」の極めて美はしく柔き声なり」と評されている（『帝国文学』第1巻第8号、明治28年8月）。同前、79頁
- 19 柴田環『世界のオペラ』（共益商社書店、明治45年）90頁
- 20 秋山龍英『日本の洋楽百年史』259頁。文中の〔 〕は引用に際して追加
- 21 同前 260頁
- 22 増井敬二『浅草オペラ物語』（音楽現代社、1990年）68頁。一部表記を変更して引用
- 23 秋山龍英『日本の洋楽百年史』289頁より
- 24 増井敬二『日本のオペラ』323頁
- 25 秋山龍英『日本の洋楽百年史』312頁より。この配役は当初予定の11月3日の告知に基づく。
- 26 増井敬二『日本のオペラ』324-25頁より
- 27 秋山龍英『日本の洋楽百年史』318頁より
- 28 『浅草オペラ物語』40-41頁
- 29 妹尾幸陽は明治43年から出版を手掛けたが、セノ音楽出版社は大正4年に設立された。
- 30 増井敬二『日本のオペラ』408頁
- 31 同前 410頁
- 32 『日本オペラ史 ～1952』190頁
- 33 秋山龍英『日本の洋楽百年史』296頁及び344頁
- 34 軍楽隊は明治末期まで管楽器を使用して弦楽器を用いなかったが、明治42年に弦楽の研究を開始し、大正期には弦楽器を含むオーケストラの編成で演奏を行った。三浦俊三『本邦洋楽変遷史』（日東書院、昭和6年）701頁
- 35 秋山龍英『日本の洋楽百年史』402頁
- 36 「ゼビラノ理髪師」のタイトルは筆者所蔵の初版楽譜（大正12年）に基づき、その奥付では「セビラの理髪師」とある。その後の再版（筆者所蔵の大正15年第10版）ではタイトル頁が差し替えられて題名が「セヴキラの理髪師」に変わったが、楽譜のタイトルはどちらも「ゼビラの理髪師」である。曲は「今の歌声」で、楽譜は数字譜による。（図版を含め2014年9月増補）
- 37 堀内敬三『音楽五十年史』（鱗書房、昭和17年）349-350頁
- 38 『寺田寅彦全集 第13巻』（岩波書店、1997年）50頁
- 39 『日本オペラ史 ～1952』149頁
- 40 同前 462-64頁
- 41 同前 149頁
- 42 同前 464-66頁
- 43 同前 466-68頁
- 44 堀内敬三『音楽明治百年史』（音楽之友社、昭和43年）168頁
- 45 『日本オペラ史 ～1952』155頁
- 46 経歴は不明だが、1928～30年にミラーノで出版された二つの楽譜の作曲者に Carmelo Castagnino の名前があり、1931年9月にトリエステ市立劇場で《リゴレット》を指揮している。
- 47 同前 468-69頁
- 48 歌手名は『カーピ伊太利大歌劇筋書』（帝国劇場、大正14年）77頁の配役表から転載。
- 49 同前 469-71頁
- 50 同前 470頁と『カーピ伊太利大歌劇筋書』（帝国劇場、大正15年）97頁の配役表から筆者がアレンジした（〔 〕内は『筋書』の表記）。
- 51 次の9演目が上演された——ヴェルディ《リゴレット》《アイーダ》。グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。オッフエンバック《ホフマン物語》（日本初演）。チャイコフスキー《スパーダの女王》《エウゲニ・オネーギン》。ルビンシテイン《デモン》（日本初演）。ムソルグスキー《ボリス・ゴドゥノフ》。
- 52 次の8演目が上演された——グノー《ファウスト》。ビゼー《カルメン》。オッフエンバック《ホフマン物語》。ドリーヴ《ラクメ》。サン＝サーンス《サムソンとデリラ》。ムソルグスキー《ボリス・ゴドゥノフ》《ホヴァンシチーナ》。リムスキー＝コルサコフ《サドコ》。
- 53 大田黒元雄『歌劇大観』改訂増補版（第一書房、大正14年）166-68頁
- 54 以下、最初期のラジオにおけるオペラ関連放送については、佐藤英「1925～1926年にかけてのJOAKにおけるオペラ関連番組」（日本大学法学部『桜文論叢』第86巻、2014年2月発行。135-157頁）に基づく。
<http://www.law.nihon-u.ac.jp/publication/pdf/oumon/06.pdf> （最終アクセス確認 2014-10-11）
- 55 同前、137、140頁及び注29（155頁）。作品名もそのまま転記した。
- 56 『日本オペラ史 ～1952』473-74頁
- 57 同前 473-74頁と『カーピ伊太利大歌劇筋書』（帝国劇場、昭和2年）99頁の配役表からアレンジした。
- 58 『日本オペラ史 ～1952』476-77頁
- 59 筆者所蔵のプログラムに基づく（カーピ伊太利大歌劇団公演 三月廿四日昼 歌劇「セビラの理髪師」番組）。
- 60 実は明治44年（1911年）1月22日に当代きってのカルメン歌手エンマ・カルヴェ（Emma Calvé, 1858-1942）が世界旅行の途上横浜に寄港したが、演奏会を断念して2月1日に離日する「事件」が起きていた（註：カルヴェの自伝〔*My Life*, D.Appleton & Co., New York, 1922.〕には日本に2週間滞在し、京都と東京で歌ったと書かれているが、演奏会を行った事実は確認できない）。
- 61 4月26、28、30日の演奏会曲目は秋山龍英『日本の洋楽百年史』435-36頁に転載されているが、プロッホをプロッホと誤記。

- 62 『日本オペラ史 ～1952』 297 頁では演奏会が 4 月 30 日までとされているが、筆者は 5 月 12 日の告別演奏会プログラムと 19 日の予告チラシを所蔵している。
- 63 『日本オペラ史 ～1952』 196 頁。3 月 19 日付『大阪朝日新聞』に基づく
- 64 同前 477-78 頁
- 65 4 回の演奏会曲目は、秋山龍英『日本の洋楽百年史』 471-72 頁に掲載（『月刊楽譜』の批評含む）。但し、筆者所蔵の全 5 回のチラシとは演奏曲に違いがある。
- 66 『日本オペラ史 ～1952』 301 頁より
- 67 木村重雄『日本のオペラ史』（財団法人日本オペラ振興会編、昭和 61 年）96 頁。『日本オペラ史 ～1952』にはこの上演に関する記載なし。
- 68 『日本オペラ史 ～1952』 478-79 頁
- 69 同前 197 頁における 2 月 19 日付『東京朝日新聞』の牛山充による批評の引用
- 70 筆者所蔵プログラムの表紙における題名表記は『セキ`ラの理髪師』、本文は『セキ`ルの理髪師』。『日本オペラ史 ～1952』 306 頁に〈セヴィルの理髪師〉として記載されているが、ロッシーニのオペラとの関係は認められない。（2015 年 10 月改訂）
- 71 秋山龍英『日本の洋楽百年史』 504-05 頁
- 72 『日本オペラ史 ～1952』 311 頁より
- 73 藤原歌劇団《セヴィラの理髪師》プログラム（昭和 28 年）10 頁より
- 74 『日本オペラ史 ～1952』 314 頁より
- 75 同前 315 頁より
- 76 同前 240 及び 315 頁より（写真も 240 頁に掲載）
- 77 秋山龍英『日本の洋楽百年史』 544 頁より
- 78 同前 545 及び 547 頁
- 79 同前 554 頁
- 80 『日本オペラ史 ～1952』 322 頁ほか
- 81 出典は筆者所蔵の公演プログラム（図版を含め 2015 年 10 月増補）
- 82 『日本オペラ史 ～1952』 290 頁より
- 83 小関康幸ホームページ掲載、『音楽公論』記事一覧<5> 第 3 巻第 7 号（1943 年 9 月）より
http://www.ne.jp/asahi/yasuyuki/koseki/read_1b_ONKO_note_194309.htm
 （最終アクセス確認 2013-11-19 註：一箇所「ロジーナ」を「ロジーナ」に変更した）
- 84 木村重雄『日本のオペラ史』 289 頁。なお、同書は「藤原歌劇団」「セビリャの理髪師」に統一しているのを他文献に基づいて変更する（以下、同）。
- 85 秋山龍英『日本の洋楽百年史』 559 頁
- 86 『歌劇 セヴィラの理髪師 上演脚本』（昭和 23 年。筆者所蔵）より転載
- 87 木村重雄『日本のオペラ史』 325 頁は「東宝交響楽団」の名称を記載
- 88 『歌劇 セヴィラの理髪師 上演脚本』（昭和 23 年）21 頁
- 89 木村重雄『日本のオペラ史』 294 頁
- 90 『歌劇 セヴィラの理髪師 上演脚本』（昭和 23 年）16 頁
- 91 木村重雄『日本のオペラ史』 327 頁
- 92 『日本オペラ史 ～1952』 439 頁より
- 93 木村重雄『日本のオペラ史』 337 頁
- 94 関根礼子『日本オペラ史（下）1953～』（昭和音楽大学オペラ研究所 編。水曜社、2011 年）419-20 頁及び木村重雄『日本のオペラ史』 341 頁。配役は木村が詳しいが、初日を 2 月 1 日とするのは疑問。
- 95 筆者所蔵の公演プログラム及び木村重雄『日本のオペラ史』 342 頁より
- 96 木村重雄『日本のオペラ史』 349 頁より。役名は昭和 28 年に沿って筆者が追加した。なお、津田孝雄の名も挙がっているが役は不明。
- 97 同前 352 頁
- 98 『日本オペラ史（下）1953～』 20 頁
- 99 木村重雄『日本のオペラ史』 353 頁及び『日本オペラ史（下）1953～』 423 頁。会場は前者が日比谷野外音楽堂、後者が日比谷公会堂とする。
- 100 『セヴィリアの理髪師』（歌劇総譜全集 Vol.3。プリモ楽譜出版社、昭和 32 年）より。アリアに「詠唱」、カヴァティーナに「諷唱」の訳語を使用。
- 101 木村重雄『日本のオペラ史』 358 頁。なお、『日本オペラ史（下）1953～』に記載なし
- 102 『二期会史（1952～1981）』（財団法人 二期会オペラ振興会、昭和 57 年）59 頁。なお、高橋悠治の名前は公演プログラムに記載されていない。
- 103 本論の初稿では『二期会史（1952～1981）』 59 頁に基づく配役を掲げたが、公演プログラムに即して歌手名の表記を変更し（〔 〕内は『二期会史』における表記で、後の芸名や改姓に当たる）、併せて図版にプログラム表紙と配役日割表を追加した。（図版を含め 2014 年 9 月増補）
- 104 木村重雄『日本のオペラ史』 358-59 頁、『日本オペラ史（下）1953～』 562 頁、『二期会史（1952～1981）』 62 頁から抽出
- 105 情報源は横浜交響楽団ホームページの次の二つ（最終アクセス確認 2013-12-06）。題名は定期演奏会記録に準拠。
<http://www.yokokyo.net/yso101-150.html> 及び <http://www.yokokyo.net/yso80history.html>
- 106 木村重雄『日本のオペラ史』 362 頁及び『日本オペラ史（下）1953～』 424 頁
- 107 木村重雄『日本のオペラ史』 364 頁
- 108 公演プログラムに基づく東京文化会館アーカイブより <http://i.t.bunka.jp/> 但し、近藤安介の「安介」を「安介」に修正した
- 109 同公演プログラムに基づく。なお、役名「アンブロージ」も原本どおり

- 110 木村重雄『日本のオペラ史』165頁
 111 『日本オペラ史（下）1953～』7-8頁
 112 東京文化会館アーカイブより。訳詞者、ピアノまたはチェンバロ奏者の記載なし
 113 木村重雄『日本のオペラ史』371頁及び『日本オペラ史（下）1953～』426頁
 114 『日本オペラ史（下）1953～』601頁
 115 木村重雄『日本のオペラ史』184頁
 116 同公演プログラムに基づく
 117 同公演プログラムに基づく

付録: 明治期の管弦楽によるロッシニーとヴェルディ作品の演奏 水谷彰良 編

以下、明治期の公開演奏会における軍楽隊や管弦楽による主なロッシニーとヴェルディ作品の演奏を年代順に掲げる。ロッシニー作品は最も有名な《ギヨーム・テル》序曲に始まり、《セビーリヤの理髪師》《セミラミデ》《ブルスキーノ氏》《タンクレーディ》《アルジェのイタリア女》の序曲が加わった。ヴェルディは《トラヴィアータ》《トロヴァトーレ》《ナブコドノゾル》《リゴレット》《アイダ》《アッティラ》《オテッロ》の楽曲が演奏されている。どちらも明治20～37年はきわめて乏しく、明治37年から軍楽隊のレパートリーとして定着した。

	ロッシニー作品	ヴェルディ作品
明治20年 1887年	ギヨーム・テル 序曲 (5月14日、工科大学中堂、ウイヘルム、テルノ唱歌劇大序)	トラヴィアータ 序曲 (7月9日、音楽取調掛の演習会、トラヴィアータノ序部)
明治25年 1892年	? 序曲 (6月4日、後楽園内の広場、近衛軍楽隊、ロシニー楽曲の序)	トロヴァトーレの抜粋曲 (5月23日、牛込見附雅楽稽古所、トルバドル歌劇抜萃ファンタシーの曲、管弦楽に三面の箏を含む)
明治26年 1893年	セビーリヤの理髪師の楽曲? (9月30日、宮内省式部雅楽稽古所、吹奏楽、セウイラ名地の剃髪者アリーの曲)	
明治34年 1901年	セビーリヤの理髪師の一節 (6月22日、日本郷中央会堂、ゼビルラの理髪師の一節、管弦六部の合奏)	
明治35年 1902年	? (7月5日、東京音楽学校の奏楽堂、クラリネット独奏 [弦楽伴奏] カンタビレ)	
明治37年 1904年	ギヨーム・テル 序曲 (5月21日、小石川植物園、陸軍軍楽隊 ウーヴェルチュール ギイヨイム) (5月29日、小石川植物園、陸軍軍楽隊 ウーヴェルチュールギイヨイム)	ナブコドノゾル 序曲 (4月10日、高等商業学校講堂、歌劇ナブコの序)
明治38年 1905年	ギヨーム・テル 序曲 (8月1日、日比谷音楽堂、陸軍戸山学校軍楽隊、大序 ギユイヨーム、テル)	
明治39年 1906年	セミラミデ 序曲 (9月29日、日比谷公園音楽堂、海軍軍楽隊、歌劇「セミラミス女王」序曲) ギヨーム・テル 序曲 (10月28日、和強楽堂、弦楽合奏東京音楽会演奏部員 ウキリアム、テル) (11月11日、雨天順延、日比谷公園音楽堂、歌劇「ウイヘルム禱歌ム、ベル」序曲)	ナブコドノゾル 序曲 (5月16日、神田美土代町青年会館、ナブコ歌劇の序) (7月28日、雨天順延、海軍軍楽隊、歌劇ネブカチザール王序曲) リゴレットの楽曲 (11月25日、日比谷公園音楽堂、陸軍軍楽隊、リゴレット)
明治40年 1907年	ブルスキーノ氏 序曲 (6月9日、日比谷公園音楽堂、陸軍軍楽隊、大序プリユスキノ) ギヨーム・テル 序曲 (12月22日、青年会館、合奏、ウキリアムテル)	ナブコドノゾル 序曲 (11月24日、日比谷公園、海軍軍楽隊、ネブカトネザール王歌劇序曲)

<p>明治41年 1908年</p>	<p>タンクレーディ 序曲 (4月12日、日比谷公会堂、陸軍軍楽隊、序曲タンクレード)</p> <p>セビーリヤの理髪師 序曲 (6月12日、日比谷公会堂、陸軍軍楽隊、歌劇セビーールの理髪師)</p>	<p>リゴレットの楽曲 (3月8日、雨天なら順延、上野公園竹の台音楽堂、中央音楽団、リゴレットの曲)</p> <p>トロヴァトーレの楽曲 (5月10日、日比谷公園、陸軍軍楽隊、歌劇古詩人 [トロバートル])</p> <p>アイーダの楽曲 (6月12日、日比谷公園、陸軍軍楽隊、歌劇アイダ)</p> <p>トラヴィアータの楽曲 (8月8日、雨天順延、日比谷公会堂、陸軍軍楽隊、歌劇トラヴィアータ [椿姫])</p>
<p>明治42年 1909年</p>	<p>ギョーム・テル 序曲 (4月11日、日比谷音楽堂、陸軍軍楽隊、ギユイヨーム (ウイルヘルム) テル劇中の行進) (4月25日、日比谷音楽堂、横須賀海兵団派遣軍楽隊、ウイルヘルムテル序曲)</p> <p>? (9月11日、日比谷公園音楽堂、陸軍戸山学校軍楽隊、カヴァチーヌ、ホルネット独奏)</p> <p>スタバト・マーテルの楽曲 (9月25日、日比谷公園音楽堂、横須賀海兵団派遣軍楽隊、スタバーマール讃歌曲)</p> <p>ギョーム・テル 序曲? (12月23日、神田青年会館、弦楽合奏、ウキリヤム、テル)</p>	<p>トロヴァトーレの抜粋曲 (4月25日、日比谷音楽堂、横須賀海兵団派遣軍楽隊、歌劇トロバドアー [歌の師匠] 抜粋曲)</p> <p>アッティラの楽曲 (5月9日、雨天順延、日比谷公園音楽堂、陸軍戸山学校軍楽隊、劇楽アチラ)</p> <p>トラヴィアータ 序曲 (5月23日、日比谷公園音楽堂、海軍軍楽隊、歌劇ラ・トラヴィアータ序曲) (8月8日、雨天順延、日比谷公園音楽堂、陸軍軍楽隊の演奏会、歌劇トラヴィアータ)</p> <p>オテッロ 幻想曲 (9月25日、日比谷公園音楽堂、横須賀海兵団派遣軍楽隊、悲劇オセロ幻想曲)</p>
<p>明治43年 1910年</p>	<p>セビーリヤの理髪師の幻想曲? (4月24日、日比谷公園音楽堂、陸軍戸山学校軍楽隊、歌劇「セビーール」の理髪師幻想曲)</p> <p>アルジェのイタリア女 序曲 (12月10日、日比谷公園音楽堂、遺英軍楽隊楽手団、序楽 アルジュールの伊太利人)</p>	<p>仮面舞踏会の楽曲 (9月10日、日比谷公園音楽堂、海軍軍楽隊、仮装舞踏会 綜合曲)</p>
<p>明治44年 1911年</p>	<p>ギョーム・テル 序曲 (1月4日、青山学院講堂、遣英戸山楽隊、ウキリヤム、テル序曲) (6月3、4日、雅楽及洋楽の演奏会、オーヴァチエーア ウイリアム、テル) (7月1日、神田青年会館、陸軍戸山学校軍楽隊、「ウキリヤムテル」の序曲)</p> <p>セビーリヤの理髪師 序曲 (9月23日、日比谷公園、陸軍軍楽隊、セビーール理髪師の大序)</p> <p>アルジェのイタリア女 序曲 (11月26日、日比谷公園音楽堂、陸軍軍楽隊、序楽 アルジュールの伊太利人)</p>	<p>リゴレットの抜粋曲 (4月9日、日比谷公園、?、リゴレット [歌劇抜粋曲])</p> <p>トラヴィアータ 序曲? (4月23日、日比谷公園、陸軍戸山学校軍楽隊、椿姫 [トラヴィアータ])</p> <p>アイーダの楽曲 (11月26日、日比谷公園音楽堂、陸軍軍楽隊、劇楽アイーダ)</p>
<p>明治45年 1912年</p>		<p>トロヴァトーレの抜粋曲 (6月16日、日比谷公園、海軍軍楽隊、歌劇抜粋曲 トロヴァドール)</p>